

令和3年度 補正

「デジタルツール等を活用した海外需要拡大事業（アーティスト等と連携した地域ブランドの確立に係る実証事業）」に関する報告書

一般社団法人 リリース

RELEASE;

目次

1：実証事業の概要

- 実証及び実現に向けたアセスメント対象①森林の活用
- 実証及び実現に向けたアセスメント対象②京町家の活用

2：実証事業の設計

- 未活用空間を生み出す原因の特定と解決手段の立案①森林の活用
- 未活用空間を生み出す原因の特定と解決手段の立案②京町家の活用

3：実証事業の実施

- アート活動を推進できる体制の構築
- アート活動のためのフィールドリサーチを実施
- 価値をさらに探求するワークショップの併催
- 価値を可視化する作品の制作・「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催

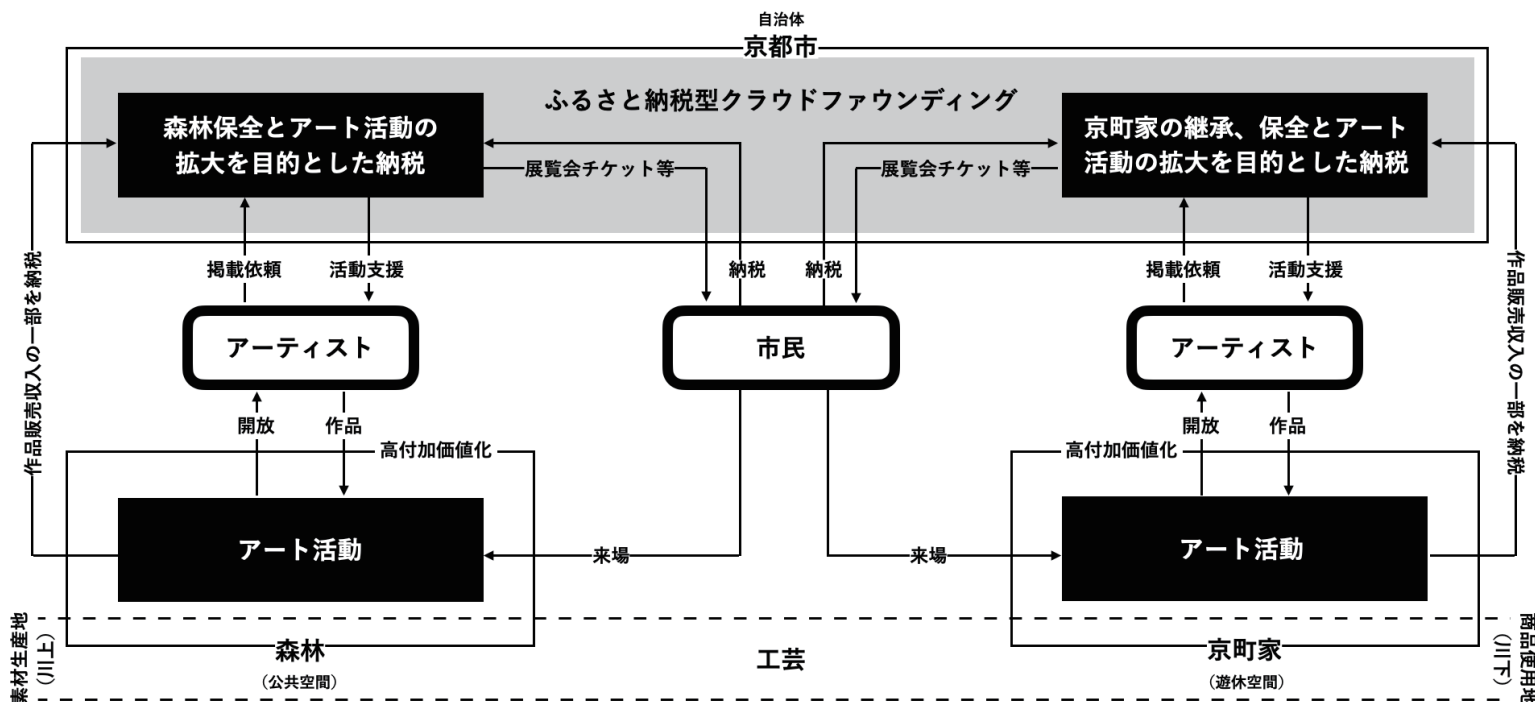
4：実証事業の検証

- 実現に向けたアセスメント：アンケート分析
- 実現に向けたアセスメント：アンケート分析
- 実現に向けたアセスメント：インタビューによるヒアリング

実証事業後の可能性

「森林」と「京町家」を舞台としたアート活動を工芸という軸でつなぎ、ふるさと納税型クラウドファンディングによって機会の拡大を図る実証事業

本事業では、アーティストが容易にアクセスできない未活用の公共空間及び遊休空間を、京都という地域性に起因することなく、全国的に同じ構造や課題がみられる「森林」空間と「京町家等歴史的建築物」空間に定め、アーティストの表現の機会を拡大するための新しい仕組みづくりに向けて、実証及び実現に向けたアセスメントを行った。また、アーティストの表現の機会を拡大するための手段としては、自治体が行う「ふるさと納税型クラウドファンディング」に注目した。展覧会チケット等を返礼品として未活用の公共空間等を活用するアート活動への支援費を集め、さらに「アート作品販売収入の一部」を次の未活用の公共空間等を活用するアート活動に補填することで、地域にアートと納税額を増やしていく好循環モデルを描き、仕組みづくりを検討、可能性を模索した。



日本の森林空間の課題

日本では長年森林面積は変わっておらず、むしろ森林環境の整備のために森林伐採が必要とされている。豊富森林資源はあるものの、木材供給は安価な輸入に傾いており、増えすぎた森林蓄積は土砂崩れなどの環境問題を引き起こしている。国内森林の適度な間伐と、国内産業への有効活用が求められている。

京町家等歴史的建築物空間の課題

京町家をはじめとする歴史的建築物は、各地域の気候や歴史、文化などを表すものでもあり貴重な地域資源といえる。一方で、歴史的建築物の保存・活用に関しては、少子高齢化などにより空き家が増加し、老朽化した結果、中古住宅としての市場価値は落ち、解体となるケースが多く見られるなど、越えるべき課題も多い。

実証及び実現に向けたアセスメント対象 -1

森林の活用

京都市は、市内の森林資源や森林空間の活用を進めることで、脱炭素社会やSDGsの実現等に寄与し、京都の豊かな森林と「木の文化」を未来へと継承・発展させることを目的に、「森林の応援団づくり事業」を令和4年度に新設した。この事業は「京都市 産業観光局 農林振興室 林業振興課」が窓口となり、ふるさと納税型クラウドファンディングで資金調達を行い、木や森林の良さを生かした新たな商品やサービスの開発や販売、社会的課題の解決に繋がる事業等に取り組む事業者を、事業資金の調達から支援するものである。本事業では、「総合企画局 都市経営戦略室」や「産業観光局 農林振興室 京北・左京山間部農林業振興センター」などと連携し、

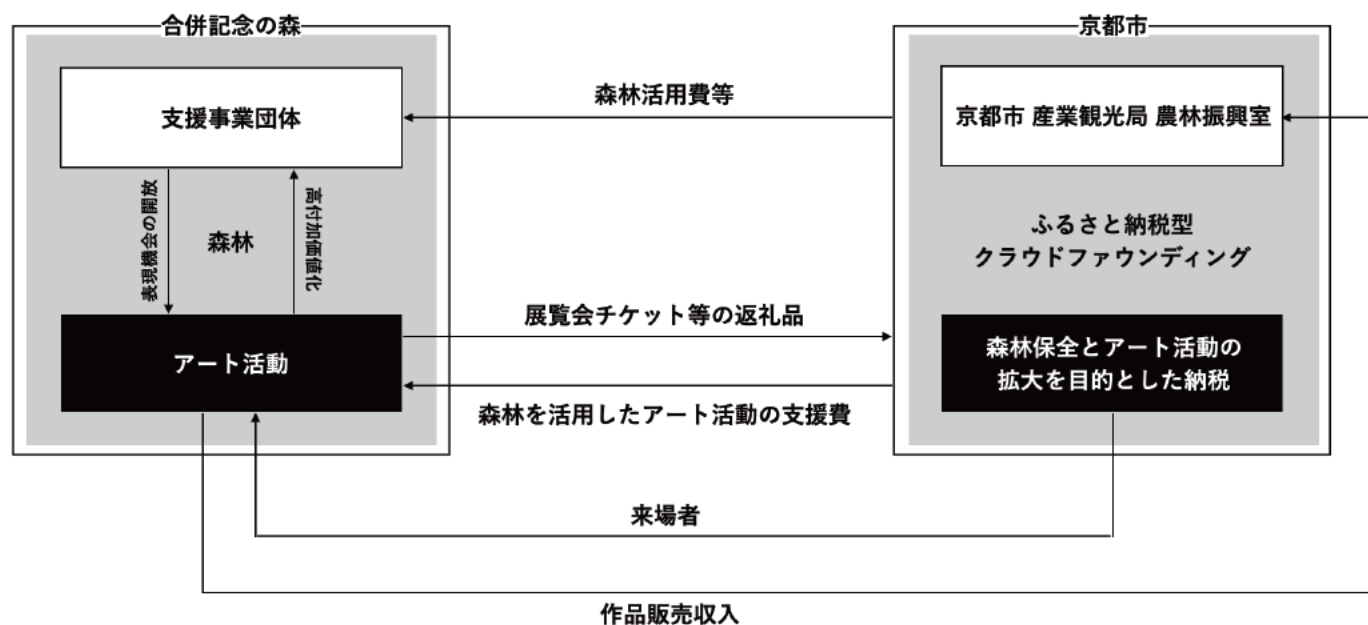
「アーティストによる森林空間の活用やアート作品を展示した森林の高付加価値化」を議論した。その結果、京都の生活文化を支える水や生物多様性を保全する森林空間の中でもアーティストの表現の場が広がり、かつ工芸素材や建築材を育む森林の持続的な継承・保全が両立する仕掛けづくりの可能性が模索された。具体的には、森林空間にアート表現の場を拡大したり、アーティストによって森（木）や工芸の高付加価値化に繋がような展覧会を開催。アート作品の販売収益の一部を「京都みどりプロジェクト 森林の応援団づくり事業寄付制度」へ納税することで、その支援事業者をはじめ、森林空間の活用を目指すアート活動等森林の保全を目的に活動する団

体に還元する仕組みづくりに向けた検討を行った。実証事業では、まずアーティストの森林空間での制作・展示の場を木工職人や森林関係者、教育関係者、自治体の協力により広げながら、工芸素材を育む森林空間や工芸技術の価値向上を行った。また、アート作品の販売収益の一部を森林保全活動に還元する仕組みへの期待や予想される収益規模について調査を実施し、「京都みどりプロジェクト 森林の応援団づくり事業寄付制度」における森林保全につながるアート活動を目的とした納税の選択肢等を、次年度以降に社会実装を試みるべく事業関係者間で協議が始まった。

持続的に機会を提供する仕掛けとなるために活用の検討対象とする自治体における制度等

京都市 産業観光局 農林振興室 林業振興課
『Arts Aid KYOTO ～京都市 連携・協働型文化芸術支援制度～』
<https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000289846.html>

アーティストの制作や表現等の機会を拡大するための新たな仕掛けづくりに向けた実証対象スキーム



実証の対象となった空間

京都市合併記念の森



京都の文化的源流である京北は、平安京をつくる木材を供給した古くから続く森林資源の生産地であり、工芸素材となる木材の産地でもある。なかでも京都市有「合併記念の森」は、「合併記念の森全体構想」により自然と文明のかけはし・百年の森づくりを掲げる公共空間である。

実証及び実現に向けたアセスメント対象-2

京町家の活用

京都市は、「文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課」が窓口となり、厳しい社会経済情勢の下でチャレンジする、アーティストなど文化芸術関係者の意欲的な活動を社会全体で支え、持続的な文化芸術の発展を目指す新たな基金「Arts Aid KYOTO ～京都市 連携・協働型文化芸術支援制度～」を令和4年度に創設した。これは「京都市 連携・協働型文化芸術支援制度」と紐づき、制度への寄付を希望している個人からはクラウドファンディングで、制度を通して事業を実施したい方々からは企業版ふるさと納税や協賛の仕組みによって、広く支援を求めるものである。令和3年度は文化芸術事業の応援に、令和4年度からは文化財保護事業への応援も加

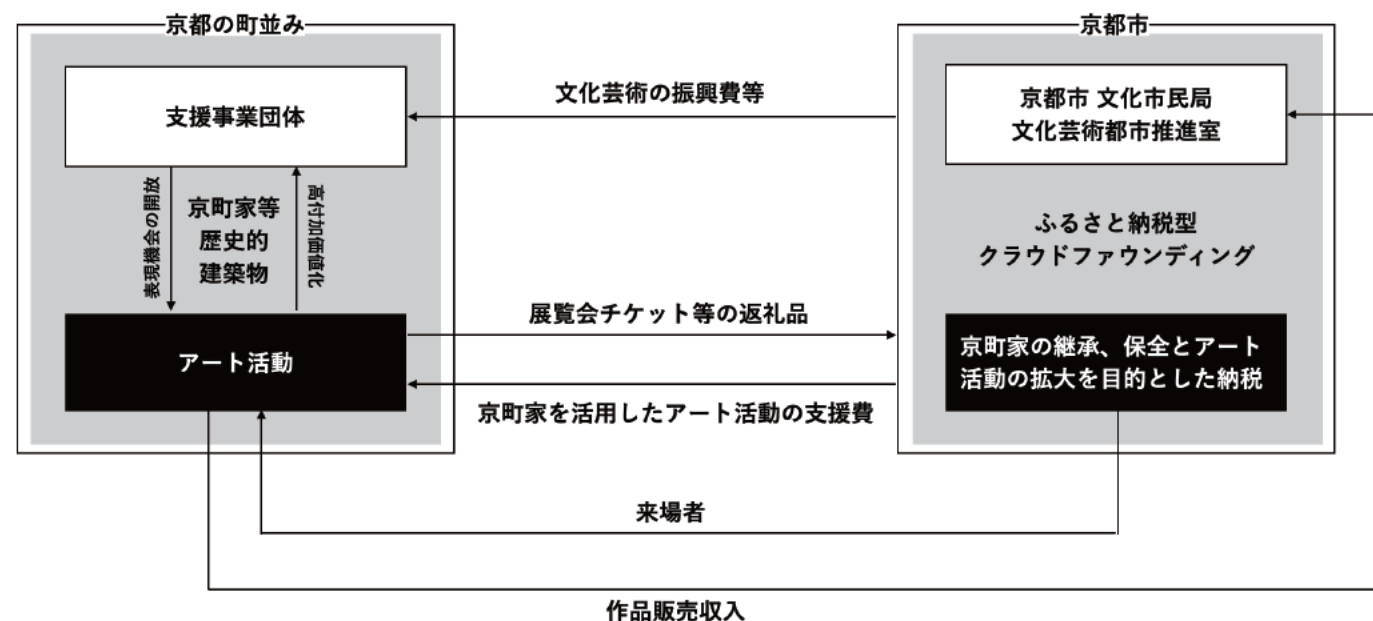
わったが、対象となる建築物は市指定有形文化財からスタートしているため、3万件ほどの京町家には未だ回路が開いていない状態だ。本事業では、「総合企画局 都市経営戦略室」や「文化市民局 文化芸術企画課」と連携し、「アーティストによる京町家の活用やアート作品を展示した京町家の高付加価値化」を議論した。その結果、京都の生活文化を支える基盤となる京町家等歴史的建築空間における表現の場の拡大と、持続的な継承・保全が両立する仕掛けづくりの可能性が模索された。具体的には、京町家空間にアート表現の場を拡大しながら、アートによって森（木）や工芸の高付加価値化につながる展覧会を開催。アート作品の販売収益の一部を「Arts

Aid KYOTO」へ納税することで京都の文化芸術の持続的な発展を目的とする団体・個人の活動を支援する仕組みづくりに向けた検討を行った。本実証事業では、まずアーティストの京町家空間での制作・展示の場を京町家関係者や自治体の協力により広げながら、京町家等歴史的建築空間が有する価値の再発見が成された。また、アート作品の販売収益の一部を京町家の継承・保全に還元する仕組みへの期待や予想される収益についても調査を実施した。今後は「Arts Aid KYOTO」でも市指定有形文化財ではない京町家の継承支援を目的に、アート活動を通じた納税の選択肢等を見出すべく、本実証事業関係者を越えた連携先とも協議を進める必要がある。

持続的に機会を提供する仕掛けとなるために活用の検討対象とする自治体における制度等

京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化芸術企画課
『Arts Aid KYOTO ～京都市 連携・協働型文化芸術支援制度～』
<https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000289846.html>

アーティストの制作や表現等の機会を拡大するための新たな仕掛けづくりに向けた実証対象スキーム



実証の対象となった空間

有斐斎弘道館



「有斐斎弘道館」は、江戸中期の京都を代表する儒者・皆川淇園が創立した学問所であり、2009年にマンションの建設計画が持ち上がったことから有志により保存の声があがり建造物ならびに庭園を保存するに至った地である。また、工芸においては、京都の工芸の特徴を形作った茶道の空間である茶室を有する。

未活用空間を生み出す原因の特定と解決手段の立案

実証企業の対象となる未だ活用されていない公共空間や遊休空間等を「森林」空間と「京町家等歴史的建築物」空間に定め、アーティストの制作や表現等の機会を拡大するような新たな仕組みづくりに向けた実証と実現に向けたアセスメントを企画設計するために、それらの空間が抱える課題とアーティストによる活用を妨げる要因を分析、解決となるアプローチを検討した。



森林の活用：京都市合併記念の森

— 未活用空間生み出す原因は何か？

原因 1	行政区、行政担当課、関連産業団体等、既存のステークホルダーが縦割り構造となっている	本実証事業の対象となった京都市有「合併記念の森」における主なステークホルダーは、林業としての活用を前提とする組織が多く、森林空間におけるアート活動を推進することをミッションとする団体の関与はなかった。唯一、一般社団法人パースペクティブが工芸素材に関する学習の地として活用していた。
---------	---	--

原因 2	ランニングコストを支える収益源が不足している	本実証事業の対象となった京都市有「合併記念の森」の保全是京都市、京都府からの補助金を主な財源としている。工芸素材に関する学習の地として活用している一般社団法人パースペクティブの活動財源もまた、京都府や環境保全団体からの補助金及び委託金を主としており、森林を活用するための継続的な収益の確保は課題となっている。
---------	------------------------	--

原因 3	ハードに関わる支援制度はあるが、ソフトに関わる支援制度が不足している	本実証事業の対象となった京都市有「合併記念の森」の保全や活用を目的として利用できる支援制度は、「京都市森林整備事業補助金交付要綱」に見られる「森林整備」ようにハード整備に対するものが主である。一方、アート活動等ソフト整備が対象となるものとして「森林の応援団づくり事業」があるが令和4年度に始動したばかりであり、現時点でアート活動に関する実績はなかった。
---------	------------------------------------	--

— 原因を解消する手段は何か？

手段 1	森林」から「京町家」までをつなぐ、「工芸」というテーマを設定した。	本実証事業の対象となった京都市有「合併記念の森」は、工芸素材「漆」の育成をしており、「漆器」の生産から消費、使用までをアーティストによるアート活動のリサーチ対象とすることで、川上から川下まで縦割り構造を横断する。
---------	-----------------------------------	--

手段 2	「ふるさと納税型クラウドファンディング」によるアート活動への参加権の返礼やアート作品そのものの販売益の再投資が可能な自治体施策の活用を想定した。	本実証事業では、ふるさと納税型クラウドファンディングである「森林の応援団づくり事業」上に森林空間を舞台に制作展示されるアート活動へ納税として掲載されることを想定して展覧会を実施、「アート活動によって人を森林空間へ誘客できるか」「アート作品の購入が森林の保全を目的に活動する団体に還元されるとしたら購入を検討するか」などを調査、ランニングコストを補填するあらたな収益源の可能性を探った。
---------	--	--

手段 3	観光開発や商品づくりを支援する「産業観光局」やアート活動を支援する「文化市民局」といったソフトを支援する自治体施策との連携を想定した。	本実証事業では、上記にあるようにふるさと納税型クラウドファンディングである「森林の応援団づくり事業」上に森林空間を舞台に制作展示されるアート活動へ納税として掲載されることを想定して展覧会を実施、次年度以降早期に「森林の応援団づくり事業」上でアート活動が掲載されるよう、アート活動の支援を担う「文化市民局」と「森林の応援団づくり事業」を担う産業観光局の関係者を交えて議論した。
---------	---	---

未活用空間を生み出す原因の特定と解決手段の立案

実証企業の対象となる未だ活用されていない公共空間や遊休空間等を「森林」空間と「京町家等歴史的建築物」空間に定め、アーティストの制作や表現等の機会を拡大するような新たな仕組みづくりに向けた実証と実現に向けたアセスメントを企画設計するために、それらの空間が抱える課題とアーティストによる活用を妨げる要因を分析、解決となるアプローチを検討した。

京町家の活用：有斐斎弘道館



— 未活用空間生み出す原因は何か？

原因 1	行政区、行政担当課、関連産業団体等、既存のステークホルダーが縦割り構造となっている	本実証事業の対象となった有斐斎弘道館における主なステークホルダーは、茶事／茶会を主催する際に参加される講座受講者や講師陣。また大学機関をはじめ学術研究者や専門家による講座、勉強会、特別な催しをされる関係者のほか、「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」のような歴史文化芸術に寄与するイベント主催者である。
原因 2	ランニングコストを支える収益源が不足している	本実証事業の対象となった有斐斎弘道館の主な財源は、公式 WEB サイトにも記載の通り（１）税法上の優遇措置が受けられる基金への寄付、（２）有斐斎弘道館の開催する講座／茶会への参加費、（３）庭や建物に関する専門知識・技術の提供に伴う謝金等によるもの。また会場利用料や理事による講演謝礼など一般的な収入源に留まるため、固定資産税や修繕修復にかかる費用を補填するような、新たなステークホルダーによる継続的な関わりや収益の確保は、他の文化施設と同課題感があると語られている。
原因 3	ハードに関わる支援制度はあるが、ソフトに関わる支援制度が不足している	京都市においては京町家を継承・保全するためのハード面における支援策が豊富にある一方で、本実証事業の対象となった有斐斎弘道館のように、それらプロセスを経た先にもどの京町家にも必要となってくる「ソフト面での継続的な支援策」や「画期的なビジネスモデルの創出支援」が少ないということは現状の大きな課題だ。つまりハードの維持管理費を補うには、ソフト事業によってのみ収益が得られるため、新たな取り組みが求められている。

— 原因を解消する手段は何か？

手段 1	「森林」から「京町家」までをつなぐ、「工芸」というテーマを設定した。	本実証事業において対象となった森林空間の活用を促してきたのは、京町家に代表されるような工芸空間であり、社会的な意味における工芸の生態系そのものとも言える。ゆえに京町家を生活文化の結節点として捉えることで、森林のステークホルダーから工芸やアートの分野までステークホルダーを広げる機会となる。
手段 2	「ふるさと納税型クラウドファンディング」によるアート活動への参加権の返礼やアート作品そのものの販売益の再投資が可能な自治体施策の活用を想定した。	本実証事業では、アーティストのアート活動による展示だけでなく、総合企画局 都市経営戦略室や文化市民局 文化芸術企画課とも連携しながら、地域企業や専門家等とともに「アーティストによる活用やアート作品を展示した町家の高付加価値化」について意見を交わし合うイベントも同時に開催し、アーティスト自身はもちろん、多様な視点から京町家空間の価値を言語化することで、ふるさと納税型クラウドファンディングを活用する際に重要な各セクターのハブとなる人材の共感を醸成する。
手段 3	観光開発や商品づくりを支援する「産業観光局」やアート活動を支援する「文化市民局」といったソフトを支援する自治体施策との連携を想定した。	本実証事業では、ふるさと納税型クラウドファンディングを通して「購入や共同所有されたアート作品売上の一部」が、次なるアーティストの制作支援になったり、アート活動による京町家（弘道館）利活用の原資へと再投資される案を話し合う。京町家保全継承の観点では「京町家まちづくりファンド」や「京町家まちづくりクラウドファンディング支援事業」は存在してきたが、指定文化財ではない京町家を対象としたアート活動への納税を実現するために「Arts Aid Kyoto」を通した「寄附つき作品の購入券」や「京町家でのアート作品鑑賞券」などをリターンに設定・提案する構想を中心に据える。

「森林」および「京町家」を活用したアート活動を推進できる体制の構築

多元的な視点を有するリサーチチームの結成

京都の工芸文化や技工の背景を多様な視点から再解釈、言語化、可視化するために、アーティストだけでなく、学術研究者やデザイナーも含め、異なる専門性をもつメンバーによる協働型のリサーチチームを結成した。また、企業、自治体、地域住民やNPOなど、アーティスト等美術関係者以外との協業の経験があり、地域におけるアートプロジェクトを手がけてきたキュレーターを選んだ。アーティストの選定にあたっては、地域固有の要素を定着させ、かつ展示・搬入が容易であるポータブルな表現メディアを手段とするアーティストを重視した。

- ・アートキュレーター：青木 彬（一般社団法人 藝と）
- ・工芸系アーティスト：山本 愛子（美術家）
- ・映像／写真系アーティスト：外山 亮介（写真家）
- ・伝統文化研究者：濱崎 加奈子（京都府立大学和食文化学科准教授）
- ・デザイナー：陳 宥柔（一般社団法人 リリース）
- ・ビジネスプロデューサー：桜井 肖典（一般社団法人 リリース）
- ・工芸プロデューサー：高室 幸子（一般社団法人 パースペクティブ）
- ・職人：西村 圭功（西村圭功漆工房）
- ・職人：堤 卓也（株式会社堤浅吉漆店）
- ・観光事業者：西澤 徹生（株式会社ニシザワステイ）
- ・行政担当者：仲筋 裕則（京都市総合企画局都市経営戦略室）

「間」をつなぐコーディネートチームの結成

縄文時代から人類が活用してきた工芸素材である「漆」を軸として、漆の樹木を生育する森林を管理する林業家、樹液を精製する漆加工業者、漆を塗布する下地をつくる木地師、漆器に仕上げる塗師まで、川上から川下までのステークホルダーをコーディネートできるチームをつくった。

概念としての『工藝の森』とパースペクティブ

工藝の「藝」という旧漢字は、人が木の苗を捧げ持って植える姿を現す象形文字である。「藝術」や「工藝」など、人の創造的行為に、この字が使われてきたということの意味を考える時、私たちは、人が創造するうえでのあるべき態度を学ぶことができるのかもしれない。

一般社団法人パースペクティブは、自然物を素材として何世代にもわたって受け継がれてきた日本の工藝のあり方に、これからの時代のモノづくりが学ぶべき有益なヒントを見出し、モノづくりを育む社会的土壌を再構築しようと、2019年6月の創業以来活動している。

「うえる」「そだてる」「いただく」「つくる」「つかう」「なおす」といった行為が循環的に行われてきた工藝の歴史に着目し、モノづくりはその素材が生まれた地域の環境の影響を受け取り、またモノを作ることによって人は環境に作用していくという「人の創造的活動と環境との連動」を中心的ビジョンとして掲げる同社は、この活動の方向性や、思想の全体を、『工藝の森』と呼んでいる。

- <https://www.forest-of-craft.jp/>

持続可能社会に資するビジネスブランディングチームを結成

海外需要拡大に向けた地域ブランディングにおいては、京都が有する「1200年の持続可能社会という点」と「工芸の有する自然との共生的技術である点」に着目。人間性を重視し、責任と倫理を遵守し、ローカルな文化に根差したサステナブルでオーセンティックなフィールドとしてのブランド訴求を図った。

一般社団法人リリース

ビジネスとクリエイティブの専門家が集い『GOOD BUSINESS ECOSYSTEM』を育ながら、自然や文化資本となる分母を減らすことなく、新たな価値観や可能性を体現するビジネスを分子として可視化する非営利型のビジネスプロデュースカンパニー。国境や地域を越えて、さまざまな才能や想いを携える仲間がネットワークを形成し、パートナーとなる地域企業や自治体、NPOやクリエイターとともに多様な価値を共創。業態開発やブランディング、事業や商品開発、イベントやウェブサイトをはじめとするメディアづくりに至るまで、領域を横断しながら価値転換を促す。

- <https://release.world/>

「森林」と「京町家」をつなぐ工芸を巡り、アート活動のためのフィールドリサーチを実施

リサーチチームは、工芸素材「漆」の生産地であり本実証事業の対象となる森林空間のある「京都市・京北エリア」から、多くの職人が集積し工芸品の加工場としての京町家が多い「京都市・市街地」、そして茶道、料亭、寺社仏閣等が集積し工芸品を用いる生活文化拠点としての京町家空間のある「京都市・御所及び東山エリア」まで、職人の仕事場や茶席等を巡り、「工芸」を補助線として背景化された価値の探求を行った。

エリア1 京北エリア 工芸素材の生産地としての「森林」空間 — 川上

合併記念の森（工芸の森）

素材の川上 — 材料：京北

本実証事業におけるアート活動のためのフィールドワークは、京都にとって「素材の源流」とも言える、京北地域から始まった。京北とは、京都市の北西部に位置し、1町5村が戦後に合併し「京北町」となったのちに2005年に京都市に合併吸収され、京都市内であるにもかかわらず市街地からは車で1時間ほどかかる山間地域である。この地域は、かつて平安京遷都にあたり、桓武天皇が都の創建のための木材を供給するため、山や木々に関わる人々を派遣して拓かれた地域である。都の形成に寄与したモノづくりの上流は、文字通り川という自然の物流インフラの上流でもあった。筏に組まれた木材は桂川を下って、トラック台頭までの都市の建設・建築を支えてきた。

合併記念の森内「工芸の森」のフィールドリサーチ

京北でのフィールドリサーチの初回は、本実証事業において工芸領域のコーディネートを担う一般社団法人パースペクティブの取り組み「工芸の森」の活動拠点の一つである、京都市京北内の森にて行った。2haほどのこの森は、京都市が所有する268ha（東京ドーム57個分）に広がる「京都市合併記念の森」の中にあり、工芸素材を植え育てることを目的に京都市と協定を締結し同社が借り受け、管理している。合併記念の森はもともとは私有地で、80年代にゴルフ場開発のため所々伐採されたが、バブルが弾けると経済難に陥り、計画は頓挫した。その後京北町（当時）がこの土地を買取り町有となり、京北町が京都市に合併されると共に京都市に寄贈されたという経緯を持つ。開発中止から長年に渡り放置された結果、現在は、スギ・ヒノキの植林が大半を占める京北の森林においては希少な、多様な樹種が再生する、独

特の植生を育んでいる。

リサーチチーム一行は本実証事業のコーディネーターでもあり、この森を運用する（一社）パースペクティブの高室幸子さんをナビゲーターとしてこの森を歩いた。高室は地元の林業家で森林生態学のバックグラウンドを持つ塔下守氏の指導のもとで三年半にわたり学びながらこの森に関わり、漆をはじめとする工芸素材を育てている。

漆の植栽地は、獣害柵に囲まれている。この地域は過去15年ほどの間に鹿が増え、鹿が食べるために皮を剥いだことにより部分的に壊死しつつある木々が敷地内のあちこちでも見られた。落葉樹が葉を落としている冬季（実証事業実施期間）に青々としている常緑広葉樹は、毒性のある馬酔木（アセビ）と冬青（ソヨゴ）くらいで、他の葉は、鹿が食べてしまうという。また、私たちの多くは川は地上を流れるものと思っているが、森を長期に渡り観察していると、水の経路というのは地下にも至る所にあり、川は大雨のごとに形を変え、地上に出たり地下に潜ったりしながら、この土地の地形に関与していることがわかる。森に穴を掘ると、水の流れが一晩にして運んできた土砂数センチと、土壌生物が落ち葉や枯れ枝などの有機物を何百年とかけて分解して積み重ねる土が数センチがレイヤーとして重なり、森に重なるさまざまな時間軸の存在を確認できた。

塔の共有林でのフィールドリサーチ

一方、京北での2度目のフィールドワークでは、塔下守氏とともに、京北塔町の共有林を歩いた。京北は字（あざ）ごとに森林を共有資産として共同で管理し、受け継いでおり、こうした森から伐り出された木材の収益が、地域インフラの修理修繕や共同事業に充てられてきた。

塔下守氏（林業家、塔下木材）、高室幸子氏（パースペクティブ 共同代表）によるガイド



ところが、スギ・ヒノキが資産的価値を持つ時代は過ぎ、地域住民は共有すべき森の姿や目的を模索している。リサーチした森林は、次の時代への共有林を考える試みとして広葉樹を含む多様な樹種を植える実験的な林地と、従来の建材生産の場としての林地が、道路を挟んで隣接し、対比的な景観を生み出している。

5年ほど前に再造林された共有林には、まだ若いケヤキやブナなどの広葉樹が散見される。また、通常はこの辺りには生えないような植物も自生しており、再造林の際に河川から運び込まれた土砂から発芽したと説明された。一方、杉・ヒノキの森からは、間伐・枝打ちの跡も多くみられ、地域の財産として大切に管理されてきたことが伺えた。

「森林」と「京町家」をつなぐ工芸を巡り、アート活動のためのフィールドリサーチを実施

エリア2 京都市街地エリア 工芸品の加工場としての「京町家」 — 川中

本実証事業におけるアート活動のためのフィールドリサーチのもう一つは、工芸品の加工と販売の場である京都市街地である。工芸領域のコーディネートを担った一般社団法人パースペクティブの代表理事でもある、堤氏が四代目を務める漆精製業者の株式会社堤浅吉漆店は市街地中心の佛光寺近くに工房を構える。漆の精製現場に加え、腕物の下地となる木地製作と塗りの工程では、西村圭功漆工房もリサーチフィールドとして巡り、職人から職人へと連帯する工芸品製作現場を辿った。

堤浅吉漆店

堤 卓也 氏（堤浅吉漆店、パースペクティブ共同代表）によるガイド



明治42年創業の堤浅吉漆店は、ウルシの木から採取された漆樹液（荒味漆）を仕入れ、精製・調合を行い塗料とする漆メーカーである。4代目で専務の堤卓也氏は、サーフボードや自転車に漆塗りや仕上げなど、これまでの伝統工芸の枠を超えた形で素材としての漆の魅力を伝えてきた。漆の川上と川下の間にいる立場から素材の川上に対しての認識を高めたいと早くから活動し、その活動を後押しするために2019年に高室幸子と一般社団法人パースペクティブを共同設立した。

日本の漆の流通量は過去40年間の間に約6%にまで落ち込み年間30トンほどしかないが、そのうちの約93%を中国からの輸入に頼っている。希少な国産漆は、主に文化財修復に使用されるが、同社はその国産漆の約7割を取扱う。

1貫～5貫（1貫は約3.75kg）という少量ロットで漆掻き職人から納品される、一桶ごとに異なる質を持つ荒味漆を日々吟味し、塗料としての漆を「個々に求められる条件に応じて」微細に精製・調合することが、同社が代々

にわたって培ってきた専門性である。「塗師（ぬし）」と呼ばれる漆を塗る職人が漆を塗る際に求める硬化速度、粘度や艶を作り出し、同時に、各々の塗師が塗る時の環境（温湿度）をも加味するという。

現代の経済理論に照らし合わせると不採算と見做されがちなことであるが、職人同士が徹底的に互いの仕事のしやすさに寄り添うことで、職人文化全体としての美と技が受け継がれてきたことを学んだ。

西村圭功漆工房

西村 圭功 氏（塗師、西村圭功漆工房）によるガイド



西村圭功氏は、堤浅吉漆店にとってみれば、顧客となる。西村圭功漆工房は、茶道文化によって洗練されてきた京漆器の流れを汲み、「棗（なつめ）」と呼ばれる、抹茶を入れておく茶道具が代表的なプロダクトである。棗の木地は薄さ0.5mm程度、透かして向こうの光が見えるほどに薄い。その生地、何十工程ものプロセスで漆を塗り重ね、強度と密閉性を実現している。

圭功氏自身の茶道具以外の作品作りは、京漆器特有の極限まで薄引きした木地が漆の硬化によって撓む性質を活かし、その特性を意図して引き出したものが代表的であり、この技術を「撓め（たわめ）」と呼んでいる。

京漆器をはじめとして京都の工芸の多くは、その気候や植生を必然的な背景としてモノづくりが行われた「産地」と異なり、貴族文化の審美眼と高い要求に応えるべく、全国から集められた技と材料によって洗練されてきた。しかしそのような貴族文化がすでに消滅している今日、それを支える無数の専門分野にて、継承の課題を抱えている。

京漆器における「木地師（きじし）」も例外ではない。数年前、京漆器の木地師の後継者育成のため、塗師の圭功氏はこれまで塗師しかいなかった自身の工房に若手木地師2名を採用し、京都随一の木地師、西村直木氏とともに彼らを育て始めた。

都の文化によって洗練された京漆器であるが、暮らしの中で使われることがなければ未来はないと、木地師の直木氏、漆メーカーである堤卓也氏（堤浅吉漆店）などとともに、京漆器の高い木地技術と美意識を体現する日常使いの碗を開発した。大正時代まで京都の民衆が使用していたという碗に準えて「アサギ碗」と名付けられたこの碗は、需要が減少している茶道具に替わり、若手が修行の中でいくつも作って技を磨いていく、日々の修練を助けている。

またこのアサギ碗は、「産地」と異なり最高級材料与技術を集めた京都であっても、民衆の日常はあったことを想像し、京都が木の材料を求めた最も近隣の山、つまり京北のヒノキ材を使用している。

「森林」と「京町家」をつなぐ工芸を巡り、アート活動のためのフィールドリサーチを実施

エリア3 御所及び東山エリア 工芸品を用いる生活文化拠点としての「京町家」 — 川下

本実証事業におけるアート活動のためのフィールドリサーチの最後は、工芸品の発注元であり、使用主となる茶道の場として御所エリア、花街・料亭文化の集積地東山エリアである。伝統文化プロデューサーであり伝統文化研究者である濱崎加奈子氏が館長を務め、本実証事業の対象となる京町家空間である有斐斎弘道館では茶道及び茶席での用いられ方を調査する。一方、東山エリアでは東山区役所の協力のもと歴史的建造物や木造建築の空き家、遊休施設であった元旅館・料亭の現状をヒアリングし、課題を把握した。

NOHGA HOTEL ノーガホテル 清水 京都

長友 健太朗氏（ノーガホテル 清水 京都 総支配人）によるガイド

「NOHGA HOTEL KIYOMIZU KYOTO」は、日本国内だけでなく、世界各国から観光客が集まる京都市内の中で、建仁寺・祇園・清水寺等が徒歩圏内の東山区に立地、「MEET HOT KYOTO.」のコンセプトのもと、数多の美が、知恵が、歴史が、感動が眠る、この土地を知るための、さまざまな“きっかけ”がホテルの中に散りばめられており、多種多様な京都文化に日々多くの人が集うコミュニティ創出型のホテルを目指している。

<https://noghahotel.com/kiyomizu/>



SIGHTS KYOTO サイツキョウト

西澤 徹生氏（株式会社ニシザワステイ 代表取締役）によるガイド

「SIGHTS KYOTO」は、京都五花街のひとつ宮川町に立地する、築100年以上の京町家をリノベーションした、バー&カフェや観光案内所・ワーキングスペース・物販スペースなどからなる複合施設。京都観光の中心地である祇園と鴨川の間にあり、旅行者だけでなく地元の方も気軽に立ち寄れて双方の時間を共有できる場所として機能する。

<https://sights-kyoto.com/>



公益財団法人有斐斎弘道館

濱崎 加奈子氏（公益財団法人有斐斎弘道館）によるガイド

「有斐斎弘道館」は、江戸中期の京都を代表する儒者・皆川淇園が創立した学問所。2009年にマンションの建設計画が持ち上がったことから有志により保存の声があがり、2013年に公益財団法人化、建造物ならびに庭園を保存するとともに、現代における学問所の再興をめざして、活動を続けている。

<https://noghahotel.com/kiyomizu/>



「森林」と「京町家」の価値をさらに探求するワークショップの併催

本実証事業におけるアート活動のためのフィールドリサーチとともに、学術研究者や観光事業者の視点からみた京都の生活文化の価値や現在抱える課題等をプレゼンテーション形式で得るワークショップを開催。フィールドワークにおいて、アーティストのなかに生まれた問いや発見と他領域の視点が交差することで、展示期や展示後の連携を育むために、関係性が醸成される機会として設計した。また、フィールドリサーチとワークショップで得た知見や美的発見を各自の視点から共有することで、「森林」と「京町家」を繋ぐ工芸の生態系を補助線に、アート作品によってフォーカスをあてる価値について言語化することを目的とした対話を実施した。

第1回 〈学術的視点からのプレゼンテーション〉

公益財団法人有斐斎弘道館 濱崎 加奈子氏



第2回 〈観光事業者の視点からのプレゼンテーション〉

株式会社ニシザワステイ 代表取締役 西澤 徹生氏



第3回 〈アーティストの視点からのプレゼンテーション〉



* 今回の実証事業では、工芸文化の一側面を育み受け継いできたさまざまな要素（技・人・暮らし・風土・材料・道具）の複雑な連関を、「工芸の生態系」という言葉をメタファーとして、いわば社会的な意味で生態系と捉え表現しているが、一方で、森林生態学の専門家と森を歩くことによって得られた、ある一定の閉鎖された環境の中での生態学的プロセス（多様な生物間の関わりや更新サイクル、遷移など）の観点からの学びもあり、アーティストはインスピレーションを受けていた。

「森林」と「京町家」の価値を可視化する作品の制作

山本 愛子：工芸素材の育つ森林の現状を訴求する植物を選び、地域の色を染める

本実証事業におけるアート活動のためのフィールドリサーチ及びワークショップを基層としながら、アーティストは展示空間を想定した作品プランを構想した。制作にあたっては、フィールドワークによって発見した工芸素材及び工芸道具からの着想や、工芸技術の転用を積極的に行うとともに、それを可能にする職人のサポート体制を構築した。

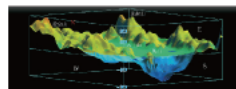


ア ティストの制作ノートより抜粋

《Invisible water》（仮タイトル）



目に見えない/地下と地上/水/儀式



京都にはみえない水がある。約211億トンもの地下水である。この地下水と共に、脈々と京都の文化が広がってきた。染色は、目に見えない水に「色」を施し、見える形にする行為でもあるといえる。布を水で濡らせて染めたあと、水が蒸発したあとにも、色だけが布に留まることで、そこに水があった痕跡をのこしていく行為である。この作品では、みえない水を、染色と布によって目に見える形に表現することで、目に見えない水の存在を想像してもらい、人、森、モノの見方が反転するきっかけをつくりたい。

京都にはみえない水がある。約211億トンもの地下水である。この地下水と共に、脈々と京都の文化が広がってきた。染色は、目に見えない水に「色」を施し、見える形にする行為でもあるといえる。布を水で濡らせて染めたあと、水が蒸発したあとにも、色だけが布に留まることで、そこに水があった痕跡をのこしていく行為である。この作品では、みえない水を、染色と布によって目に見える形に表現することで、目に見えない水の存在を想像してもらい、人、森、モノの見方が反転するきっかけをつくりたい。



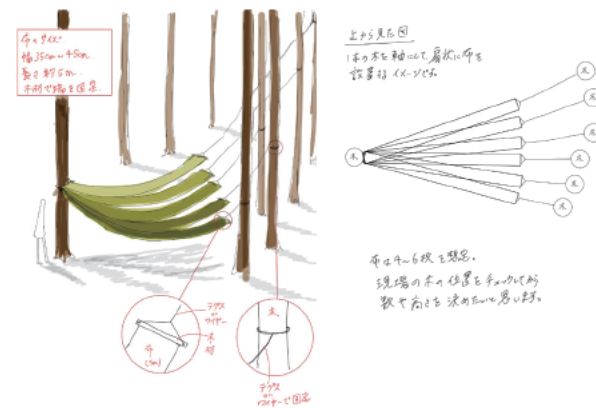
現地で行うこと

1. 植物探し、媒染液がしをして、染料と助剤の素材をつくる。
2. 染井（そめい）の井で水を汲み、その水で染料をつくる。
3. 持ってきた布を重力の力を利用してグラデーションに染める。
4. 染めた布を、弧を描くようにたわませて森（10枚程度）と弘道館（1-2枚）に展示をする。



外から来た私が滞在制作を行う意味

滞在制作をすることは、京都と水の関係について私自身が深く知るための旅であり、その旅路で出会ったこと、知ったこと、感じたことを展示期間中に人々にシェアをする。更に共同で知見を深めていく場にしたい。



これから

この作品を展示する自体をひとつの儀式と捉える。（工藝の森の気配を布に染み込ませるようなイメージ？）その布が、これから人の生活圏で仕立てられて使われていく。



「森林」と「京町家」の価値を可視化する作品の制作

外山 亮介：地域の木材から写真機をつくり、空間に宿る価値へ眼差しを向ける

本実証事業におけるアート活動のためのフィールドリサーチ及びワークショップを基層としながら、アーティストは展示空間を想定した作品プランを構想した。制作にあたっては、フィールドワークによって発見した工芸素材及び工芸道具からの着想や、工芸技術の転用を積極的に行うとともに、それを可能にする職人のサポート体制を構築した。



ア ティストの制作ノ トより抜粋



工藝の森

工藝の森に数寄屋造りのような、神社のような様相のカメラオブスキュラを設置し、カメラの中にはヒノキの丸い板を設置する。カメラは工藝の森で漆の木が成長していく姿やそれを手入れする人々の活動を映し続ける。

15～20年後、採取した漆を丸い板に塗布する。

すぐに完成を求める作品づくりではなく、自然の時間の流れに合わせることを意識した作品。



弘道館

待合：待合の床の間に何か飾りたい。今回の企画に沿うことの出来るお軸か？これらは手元にあるので使用出来るが、本展示に意味的に繋げられるか要検討。

庭：待合からお茶室に向かう庭の各所に外山が美しいと思う光にカメラを向けて設置していく。来客者たちはそのカメラのファインダーを覗きながらお茶室へ向かう。

カメラは現代的なものから古いものまで使用。古いカメラのファインダーの中の光景は、その性質上、左右や上下が反転される。浮世でのものの見方を少しずつ変化させていく仕掛け。

弘道館 庭



待合からお茶室に向かう庭の各所に外山が美しいと思う光にカメラを向けて設置していく。来客者たちはそのカメラのファインダーを覗きながらお茶室へ向かう。カメラは現代的なものから古いものまで使用。古いカメラのファインダーの中の光景は、その性質上、左右や上下が反転される。浮世でのものの見方を少しずつ変化させていく仕掛け。



デジタル一眼の映像を撮る記録
モニターに映る庭の光



35mmフィルムカメラ



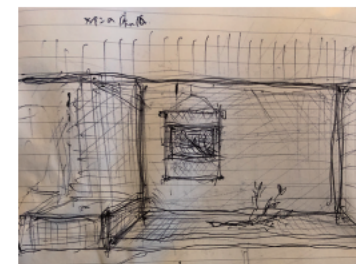
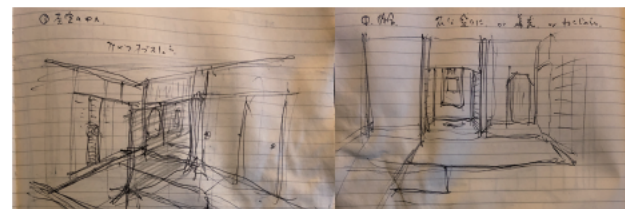
中判カメラ Mamiya RB27
大判カメラ Tohoku 4.5
別冊 30x12



後方視覚カメラ Shofun
※このカメラを撮影するカメラ撮影や



茶室：茶室をカメラオブスキュラに。入り口にレンズを取り付け、茶室内にスクリーンを設置し、外の蹲（？）に水が滴り続けている様子が上下を反転させながら静かに映し出される。室内を暗くするため、襖などを入れて遮光したい。



広間 床：広間の床間に徒然草の一節「花は盛りに 月は隈なきをのみ見るものかは」に関わるお軸を飾りたい。今回の企画自体が「盛り＝完成」ではなく途中であること。そこに魅力があること。

完成されたものばかり賛美される見方を変えていくための仕掛け。



制作・滞在拠点の提供 - アーティストインレジデンス機能 -

Fab Village Keihoku (旧京北第三小学校：京都市京北町)



一般社団法人パースペクティブが運営するもう一つの拠点は「ファブビレッジ京北」と呼ばれるシェア工房である。本年3月21日に正式オープンしたこの施設であるが、今回アーティスト外山亮介氏には、プレオープン期の工房を使用して制作してもらった。

このシェア工房は、「作る」という行為を通して、「素材」や「素材の生まれてきた背景」を「知る」ことをサポートする場所である。工芸を背景とした同社が、平安京の創建にあたって木材を供給した歴史ある林業地域という地域性を生かし、林業の課題と工芸の課題の両方にアプローチすることを意図に設立された。

廃校となった小学校の元給食調理室を木工室として整備し、施設内には専門職人が使用する大型機械と、一般利用者が使用できる伝統的な手道具や、電動工具を備え、広々とした作業台を利用することができる。大きなものから小さなものまでを、地域の木材を使って作れる木工設備を用意している上、伝統工芸の技術を有する木工職人が常駐しているため技術的なサポートを受けることができる。

今回のアーティストの作品制作でも、写真家である外山氏は日常的にある程度木工に親しんでいるものの、祠に見立てたかのような趣のカメラは、複雑な構造となり、大きな挑戦であったが、ファブビレッジ京北所属の指物師（釘を使わずに木同士を組み合わせることを専門とする木工職人）である吉田聖也がサポートを担当した。

辻の家



天童山と桂川、京北地域の地形を象徴するかのような景勝地を背に立つ築100年の古民家は、一般社団法人パースペクティブのレジデンス拠点であり、また本社社屋でもある。

アーティスト山本愛子氏の滞在制作は、この古民家を拠点に行われた。

この地域の典型的な日本家屋であるこの家は、約300平米の敷地に、3部屋ある個室、台所、そして居間から成る母家の他、農作業小屋と蔵が立っている。母家の部屋と部屋は襖で仕切られ、アーティストの制作や滞在のニーズに合わせて可変のレイアウトで対応することができる。台所は勝手口と玄関両方から出入りすることができ、また平家構造であるため、染色を中心とする制作活動に伴う水仕事と煮炊き、（大々的に洗濯物を干すように）乾燥を繰り返す今回のような制作活動では、家屋内外の移動がしやすく使い勝手が良いとの評価であった。加えて、田舎に特有な広めの外水道、カセットコンロなど充実したアウトドア用品、たくさんある大きな鍋、染色した布を干すのに十分な広さの庭が、これまで想定していた以上に制作活動の役に立った。

Arts in KOGEI / KYOTO ～ Reversal to Spiral ～

展覧会のインフォメーション

『螺旋への反転』は、工芸品を使う暮らしの文化拠点【有斐斎弘道館 (Site1)】と文化を育んだ工芸材料の源流としての郷京北【合併記念の森 (工藝の森) (Site2)】の二会場で開催された。

Site1 有斐斎弘道館

2023年3月17日(金) 10:00～17:30

本企画のキックオフとして、有斐斎弘道館を舞台にアーティストの作品展示および交流会を行いました。集まった皆さんと共に、日常とは異なる身体、そして時間感覚を共有し、工藝の生態系への感受性を高めた。

Event チェックイン・トーク

本企画をケーススタディとして、アーティストが地域の文化・産業に触発されながら職人や研究者、企業人など異なる創造力を持った人々と協働することの可能性についてディスカッションを行った。(アーティストや招待者のみで実施)

Site2 工藝の森

2023年3月18日(土)～21日(祝) 11:00～16:00

“工藝の生態系”の源流として、漆の木々が育まれる森を舞台に、アーティストが作品展示を行いました。作品は展示期間を終えてからも形を変えながら、工藝の生態系コミュニティやこの場所と関わり続けながら展示・活用される予定。

Event オフィシャルツアー

「工藝の森」プロジェクトを主催する一般社団法人パースペクティブや参加アーティストによるトークを聞きながら森を歩いた。

Exhibition Information

The exhibition, "Reversal to Spiral," was held at two venues: Yuuhisai Koudoukan (Site 1), a cultural center for daily life with crafts, and Forest of Craft (Site 2), a source site in Keihoku that is the origin of the craft materials that have nurtured the culture.

Site1 Yuuhisai Koudoukan

Friday, March 17, 2023, 10:00-17:30

As a kick-off to this project, an exhibition of artists' works and a social gathering were held at the Yuuhisai Koudoukan. Together with people gathered, we shared different sense of body and time, which is unlike our daily lives, and enhanced our sensitivity to the ecosystem of crafts.

Event Check-in Talk

Using this project as a case study, a discussion was held on the possibilities for artists to collaborate with artisans, researchers, business people, and others with different creative abilities inspired by local culture and industry. (Conducted by artists and invited guests only)

Forest of Craft

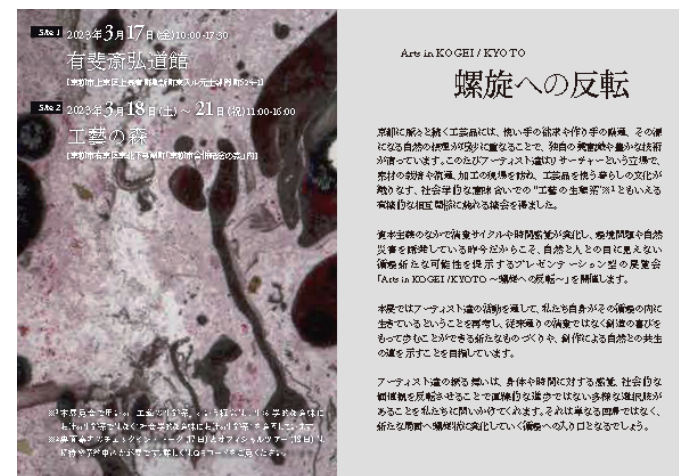
March 18 (Sat) - 21 (national holiday), 2023 11:00 - 16:00

Artists exhibited their works in a forest where lacquer trees are nurtured as the origin of the "ecosystem of crafts." The works will be exhibited and used in different forms after the exhibition period, while continuing to interact with the ecological community of crafts and this place.

Event Official Tour

Participants walked through the forest while listening to talks by Perspective Association, the organizer of the "Forest of Craft" project, and participating artists.

展覧会のパフォーマンスツール



「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催 : Arts in KOGEI / KYOTO

Site:1 京町家の活用 - 有斐斎弘道館



「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催 : Arts in KOGEI / KYOTO

Site:2 森林の活用 – 合併記念の森（工藝の森）



「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催 : Arts in KOGEI / KYOTO

山本 愛子 | Aiko Yamamoto

アーティストによるアート活動の解説



Site:1 京町家の活用 - 有斐斎弘道館

工藝の森で展示するために染色した布作品「Invisible Water」を、弘道館では静的なレイアウトになるよう意識しました。工藝の森では螺旋状に布を設置し、動的な印象にしましたが、弘道館では庭からの光を静かに掬う器のようなイメージで、光と色の関係性により焦点を当てて展示をしました。

また、外山さんの作品と共に「未完成の美」を探る空間として、床の間を活用しました。2つの床の間のうち、1つは制作時に使用した染色サンプルのハギレを展示し、作品にならなかったものの美しさや失われたものに注目を向け、もう1つの床の間には、今回の染料として使用したアセビを生けました。森に生えるアセビを人為的にトリミングして設置することで、森と都市の環境の違いも見えてきたように思います。今回、森での展示への導入として弘道館の存在があったお陰で、時間や空間の尺度が森と都市で変化することについて等々、展示の作り方からも再認識することができました。

I was conscious of creating a static layout in the Koudoukan for "Invisible Water," a fabric artwork dyed for display in the Forest of Craft. In the Forest of Craft, the fabric was installed in a spiral pattern to create a dynamic impression. However, in the Koudoukan, it was exhibited with a focus on the relationship between light and color, as if it were a vessel quietly scooping up light from the garden.

In addition, tokonoma (alcove) was used as a space to explore the "beauty of the unfinished" with Mr. Toyama's artwork. One of the two alcoves displayed scraps of fabric samples used in the production process, drawing attention to the beauty of what was not turned into artwork and losses created during the production process. In the other alcove, asebi (Japanese Andromeda), which was a plant used as a dye in this exhibition, was arranged in a vase. By artificially trimming and installing asebi that grows in the forest, I felt we were able to see the difference between the forest and urban environments. Thanks to having Koudoukan as an introduction to the exhibition in the forest, I was able to reaffirm the differences in the scale of time and space between the forest and the city, as well as other aspects, through the process of creating the exhibition.

《Invisible Water》(2023)
natural dye (Japanese andromeda longstalk holly)
variable size

Site:2 森林の活用 - 合併記念の森（工藝の森）

「Invisible Water」という作品は、私たちが普段目にすることのない地下水脈や木の内側の水分に着想を得て制作をしています。工藝の森で採集したアセビとソヨゴの2種類の植物染料を使用しました。これらは毒性があるため鹿は食べないこと、また森に繁殖するため人間が選択的伐採を行うということ、今回事業の過程で知りました。植物を採取する行為により森に与える影響を考慮し、今回はこの植物を選んでいます。

作品は6枚の布が弧を描くように配置しました。染料の濃度が最も濃くなる部分を弧の中心に据え、水の重力と色のグラデーションの関係性がシンプルに見えるように工夫しています。

また、展覧会後もこの作品が日常に繋がることを想定して、布地をシンプルな形状に留めています。リサーチ過程において、工藝の生態系を感受していくにつれて「展覧会＝完成した作品をみせる」ということが不自然に感じられたため、今回の作品は「工藝的に未来へ繋がっていく余白を残す」要素が生まれました。

The artwork "Invisible Water" is inspired by underground water veins and moisture inside trees, which we do not usually see. Two types of plant dyes, asebi (Japanese Andromeda) and soyogo (Ilex pedunculosa), collected in the Forest of Craft, were used. During the research process, I learned that deer do not eat these plants because they are toxic, and that humans selectively cut them down to prevent them from overproduction in the forest. Considering the impact that the act of collecting plants has on the forest, I chose these plants for this project.

I arranged the six pieces of fabric in an arc. The part of the fabric where the color of the dye is the strongest is placed in the center of the arc, so that the relationship between the gravity of the water and the gradation of the colors can be seen simply. In addition, the fabrics were kept in simple forms in an anticipation of the artwork's relevance to everyday life after the exhibition. In the research process, as I became more aware of the ecosystem of crafts, I felt that it was unnatural to "show the finished work at an exhibition," so I created this artwork with the element of "leaving a blank space that will lead to the future in a sense of craftsmanship."

「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催: Arts in KOGEI / KYOTO

外山 亮介 | Ryosuke Toyama

アーティストによるアート活動の解説



1



2



3

Site:1 京町家の活用 – 有斐斎弘道館

今回はリサーチ段階で、弘道館の濱崎さんから茶事の進行方法について伺いました。客人は待合を経て、当日のテーマを床の間の設えによって知らされ、庭を歩きながら日常から少しずつ気持ちを切り離していく…本展示では、その一連の行為を模した形で導線を作ることに

より、鑑賞者たちが当方の伝えたいことに触れやすくすることを狙いました。床の間には、徒然草 第百三十七段「花は盛りに 月は隈なきをのみ見るものかは」から着想を得て、「実生の桜の芽」のネガポジを反転させた写真の掛け軸を用意しました。桜は満開ばかりが素晴らしいわけではない、月は陰りのない状態だけが見頃ではない、というような意味から、工芸品の完成状態だけでなく材料や工程にも目を向けるべきではないか、という想いを込めました。

庭には自身が美しいと思うアングルを見出し、デジタルカメラから順に、古いアナログカメラまで数種類を設置しています。弘道館の素晴らしい庭を歩きながら、鑑賞者はカメラのファインダーを覗き込む…古いカメラはその性質上、左右や上下が反転されるため、日常のものの見方を少しずつ反転させていくことを目指しました。

庭を通り抜けた後のお茶室は、カメラオプスキュラに見立てています。遮光された暗い部屋にスクリーンを設置し、そこに反転しながら大きく映し出された光景は、心を落ち着かせます。風にそよぐ葉、蹲からしたたり落ちる水滴。その微かな音に耳をすませる…襖を開けると、広間に展示されている森の植物によって染色された作品から、より多くの魅力を感じ取ってもらえるようなインスタレーションを意識しました。

During the research phase of this project, Mr. Hamasaki of Koudoukan told us about the way a tea ceremony is conducted. After passing through the waiting area, guests are informed of the theme of the day by the setting of tokonoma (alcove), and as they walk through the garden, they gradually detach themselves from their daily lives... In this exhibition, we aimed to make it easier for viewers to get in touch with our intention by creating a guiding line that mimics this series of actions in the tea ceremony.

In the tokonoma (alcove), we prepared a hanging scroll with a negative-positive reversed photograph of "cherry buds" inspired by the 137th paragraph of "Tsurezuregusa" ("Why only see flowers in full bloom, the moon without covering clouds"). The meaning of the phrase is that cherry blossoms are not only wonderful when they are in full bloom, and that the moon is not only in its unshaded state when it is at its best. With this symbol, I intended to share that we should pay attention not only to the finished state of a craft, but also to its materials and processes.

In the garden, I found the angles that I consider beautiful, and set up several types of cameras, starting with digital cameras and working up to old analog cameras. While walking through the wonderful garden of Koudoukan, the viewer looks through the viewfinder of the camera... Since old cameras, by their nature, are inverted left to right or up and down, I aimed to gradually invert the way we see things in our daily lives.

After passing through the garden, the tea room is seen as a camera obscura. A screen is set up in the dark, light-shielded room, and the large, inverted scene projected on the screen is calming. Listening to leaves rustling in the wind, and water drops dripping from the wash basin. When you open the sliding door, you will find a work of art dyed with the forest plants displayed in the hall.

Site:2 森林の活用 – 合併記念の森（工芸の森）

植林された漆の木が少しずつ育っていく様子を見続ける存在として、カメラオプスキュラを工芸の森の中に展示しました。カメラの中には、丸く切り出した木の板を設置しており、15～20年後、その漆の木から採れた漆をその板に塗ることを目指しています。

長期間の屋外設置に耐えうるカメラを製作するのに、神社の御社の木組みなどを参考に、檜材を使って組み上げました。カメラが技術進歩の末に得た「瞬間を記録する」性質を排し、根源的な「見る」機能のみを宿した「展示期間中の短い時間の中では到底完成しない」自然の時間軸に寄り添う作品となっています。

モノが完成するまでの時間が著しく短縮され、瞬刻間に消費されていく現代において、この作品がカウンターとなり、鑑賞者の時間への感覚を反転させられていたなら幸いです。

A camera obscura was exhibited in the Forest of Craft as an entity that continues to view the gradual growth of the planted lacquer trees. Inside the camera is a wooden board cut into a round shape, aiming to apply lacquer from the tree to the board after 15 to 20 years.

In order to produce a camera that could withstand long-term outdoor installation, it was assembled with Japanese cypress wood, referring to the wooden framework of shrines and other structures. The camera's function to "record the moment," which was acquired through technological advancement, has been eliminated in favor of its fundamental function of "viewing," and the artwork is created to be aligned with time scale of nature, which "can never be completed in the short time available during the exhibition period." In this day and age, when an object is produced in significantly shortened time and is consumed in the blink of an eye, we hope that this artwork will serve as a counter act and reverse the viewer's sense of time.

※カメラオプスキュラ (camera obscura) とは、ラテン語で「暗い部屋」という意味。

写真の原理による投影像を得る装置のこと。

* "camera obscura" means "dark room" in Latin. It refers to a device that produces a projected image based on the principle of photography.

- 1 "Hanging Scroll"
《flower/moon》(2023) double scroll,
inkjet print on Japanese paper,
150x400mm (image portion)
- 2 "Camera Obscura displayed at Koudoukan
(including exhibition in the garden)"
《inverted View》(2023)
camera, lens, paper,
size variable
- 3 "Camea in the forest"
《Camera Obscura Observing Life》(2023)
Wood, stone, lens
800x800x1300mm (excluding stone masonry)

「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催: Arts in KOGEI / KYOTO

イベントの開催

工芸品が活用される工芸技術の結晶のような「京町家」空間から「森林」空間へ逆流する

Site 1: 有斐斎弘道館

日時: 2023年3月17日(金) 10:00 ~ 17:30 ※ 13:00 ~ 15:00 はチェックイン・トークを開催(招待制)

会場: 有斐斎弘道館 (京都市上京区上長者町通新町東入ル元土御門町 524 - 1)





｜鑑賞者名簿｜ ※順不同

濱崎 加奈子（公益財団法人有斐斎弘道館）／太田 達（株式会社有職菓子御調進所 老松）／今西 善也（株式会社鍵善良房）／山本 麻友美（京都市文化政策コーディネーター）／高室 幸子（一般社団法人パースペクティブ）／堤 卓也（株式会社堤浅吉漆店）／西村 圭功（三代・西村圭功漆工房）／鳥屋尾 優子（ワコールアイネクスト株式会社）／楠木 章弘（株式会社ワコール）／はがみちこ（京都市立芸術大学芸術資源研究センター）／曾我 高明（特定非営利活動法人 ANEWAL Gallery）／満島 孝文（京都信用金庫）／原 智治（京都市文化市民局 文化芸術企画課）／森岡 環（京都市総合企画局 都市経営戦略室）／仲筋 裕則（京都市総合企画局 都市経営戦略室）／福吉 貴英（株式会社 Q's）／前田 展広（京都市ソーシャルイノベーション研究所）／橋田 知世（株式会社こいこい）／久津間 幹（株式会社京都放送）／佐藤 慎一（株式会社電通）／大松 千紘（京都市産業観光局 地域企業イノベーション推進室）／吉田 恭三（京都市産業観光局 地域企業イノベーション推進室）／藤本 直樹（株式会社 JTB）／イトウメグミ／島田 豊司／西羽 亮哉／高坂 きぬ／西村 洋子／本吉 亮太

｜チェックイン・トーク企画・運営｜

桜井 肖典（一般社団法人リリース）／風間 美穂（一般社団法人リリース）／Chen Yuju（一般社団法人リリース）／青木 彬（一般社団法人藝と）／山本 愛子（美術家）／外山 亮介（写真家）／戸川 直美（Will Management）

「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催：Arts in KOGEI / KYOTO

イベントの開催

工芸品が活用される工芸技術の結晶のような「京町家」空間から「森林」空間へ逆流する



繋がりを作ったり、仲間を増やしたりすることの重要性を、改めてひしひしと感じる
間を結ぶような経験を実際にしたことのある人が行政の中に入るとか、少しずつ増えていくことが大切

京都市文化政策コーディネーター 山本 麻友美

コロナ以前はあまりネットワークとか重要じゃないと思っていたタイプでした。似たような人が集まり、ただ仲良くしているだけなら、あまり意味がないんじゃないか？と思っていた。でも、緊急的にアーティスト支援やアート需要について携わった時に、なんだか「回覧板さえまわらないじゃないか」と言われるくらい、アーティストのネットワークとか連携みたいなものが無いと実感した。どうしたらみんなで共有され、うまく回せるか？ということの前に、それさえも話せないくらい分断されている。間を結ぶような組織があるところもあるけれど、全国的にはそうじゃないと分かった。何かそうやって繋がりを作ったり、仲間を増やしたりすることの重要性を、今改めてひしひしと感じています。

一方で、例えばアートマネージャーとして働いていたような経験のある人が行政の中に入るとか、フリーで翻訳ができるような人が、実は少しずつ増えている。そういう人がいるとスムーズに進むことがあると認識されてきたことを思うと、それ自体のノウハウであるとか、ネットワークみたいなのを、

やはり広げていけたらと思っています。

近年アートの業界やアーティストはビジネスと連携しなさいとか、企業と連携しなさいという風に使われていますが、みんな若干「搾取されるんじゃないか？」「上手いこと使われて、何か利用されるんじゃないか？」みたいな怯えがあったように思います。でも、そうじゃないということが、ちょっとずつ理解されるようになったり、企業の方とアーティストのコラボレーション作品が作られるようになった。文化施設とかで働いていると、成果のことをすごく聞かれるので「これでどんな効果があったのか？」「どれくらい入場者数があったのか？」みたいなことばかり言われるので、企業にもそういうことを期待されていると思っていたのですが。

実際に、一緒に何か作品を作ったりしてみると、青木さんが仰ったように、そういうことを期待しているのではなく、思っていた以上にちゃんと「アーティストのことを理解しよう」としてくれている。どんな風にクリエイショ

ンというものがなされるのか？という点に、ちゃんと向き合ってくれる人がとても多いんだ、と実は感動したことがあります。また新しく「アート×ビジネス」という事業を始めますが、何かそういうことを「できるのかもしれない」という期待もあります。青木さんもそうですが、やはりそういう経験を実際にしたことのある人が少しずつ増えていくと、ちょっとずつでも伝わるんじゃないかなと思っています。

「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催: Arts in KOGEI / KYOTO

イベントの開催

工芸品が活用される工芸技術の結晶のような「京町家」空間から「森林」空間へ逆流する



何が大切なんかっていうのを、みんなで共感を得ていく。

市町村がまとまるのも、こういうアートピースや、歴史的な建物の価値。

株式会社鍵善良房 代表取締役 今西 善也

僕は一観客のような感じで、アーティストの人には遊んでいただいている。うちの美術館が出来て2年ですけど、僕もなんか最初はやっぱり、アーティストさんとかっていうのは絵を買ってとか、そういうふうな中でお付き合いしているぐらいでいたんですけど。自分で展覧会とかをやるようになって、もう「好きなように展示してください」という感じで伝えています。

いっぺん現代作家の山口晃さんの展覧会をした時も、なんか美術館の中がぐちゃぐちゃになっちゃったんですけど、面白かったんですよ。好きなことやってくださいって言って、好きなことやっていただいた。たぶん大きな企業じゃ無理で、うちみたいなちっちゃいとこやから美術館と言っても、本当に影響力とかを考えてみたら全然あかんような場所なんですけど。外の風が入ることをそんな風に理解してくれる人には、すごく楽しんでやってもらえる場所かなと思ってやっています。

特にあの場所柄、やっぱりうちは祇園町なので、今でこそ観光地やけど昔はもう

ぐちゃぐちゃの町やったんで、何でもありでもどうぞみたいな感じで、町もゆるしてくれるんじゃないかなと思っています。

いや本当に、僕もやっぱり商売人なんで、ずっとお金のことばかり考えているんで基本。お金ってやっぱり一番何事にも先立つもんだと思うんですけど、やっぱりそこは一つのツールっていうか、ものでしかないんで。使うものって、まずは人がいて、想いとかが持ちがないといかんのかなっていうのは改めて今回思いました。

さっきから言われてますけど、そういう人をいかに増やしていくかっていうことと、お金をどういうふうにするか、っていうところが今後に繋がる話かと、今回はそう思いました。やっぱり何が大切なんかっていうのを、みんなで共感を得ていくっていうか。みんな想いはバラバラですけど、市町村がまとまるのも、こういうアートピースであつたりとかするのかなと思うんで。こういう公共の歴史的な建物の価値とかは、そういうことなんかなっていうふうには思いました。

「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催: Arts in KOGEI / KYOTO

アーティストとともに「森林」を巡るツアーを実施

Site 2: 合併記念の森（工藝の森）

日時: 2023年3月18日(土)～21日(祝) 11:00～16:00 ※アーティスト等によるオフィシャルツアーは19(日)に開催

会場: 工藝の森（京都市右京区京北下弓削町「京都市合併記念の森」内）





｜鑑賞者名簿｜ ※順不同

井上 良子（京都市ソーシャルイノベーション研究所）／西谷 彩（京都芸術大学アートプロデュース学科）／久津間 幹（株式会社京都放送）／今井 さつき（アーティスト）／山中 彩（京都市立芸術大学）／堤 卓也（株式会社堤浅吉漆店）／村社 美紗子（P inc.）／橋田 知世（株式会社こいこい）／日高 健（一般社団法人小布施まちイノベーション HUB）／岡本あかね（NEWh）／森田 敦郎（大阪大学人間科学研究科）／津田 和俊（京都工芸繊維大学 未来デザイン・工学機構）／平野 春菜（アートコーディネーター）／森部 邦昭（京都外国語大学）／仲筋 裕則（京都市総合企画局 都市経営戦略室）／福吉 貴英（株式会社 Q's）／前田 展広（京都市ソーシャルイノベーション研究所）／田根 佐和子／松井 貴宏／仲筋 綾／松田 ホドリゴ／松井 貴宏

｜オフィシャルツアー企画・運営｜

桜井 肖典（一般社団法人リリース）／風間 美穂（一般社団法人リリース）／Chen Yuju（一般社団法人リリース）／青木 彬（一般社団法人藝と）／山本 愛子（美術家）／外山 亮介（写真家）

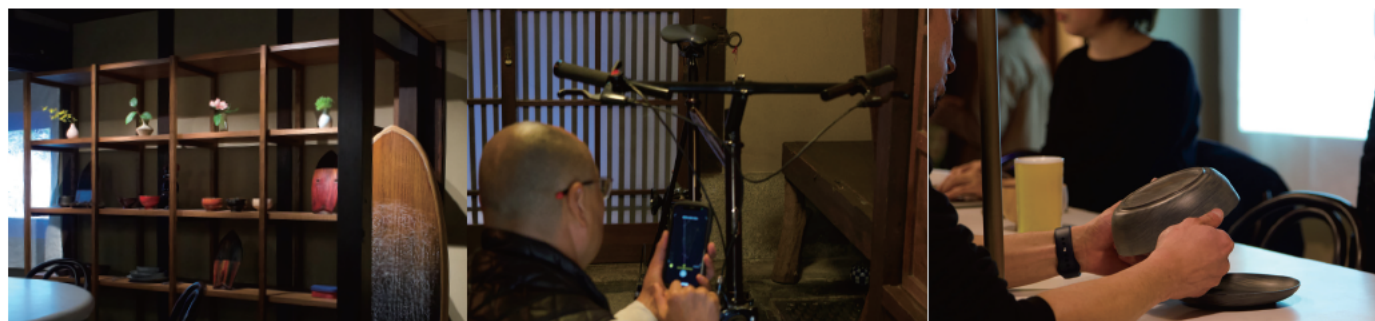
「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催: Arts in KOGEI / KYOTO

連携プレゼンテーション型ワークショップ

関連企画: 漆ナイト・トークセッション in SIGHTS KYOTO

日時: 2023年3月14日(火) 18:30 ~ 20:30 ※市内の伝統工芸関係およびフィールドリサーチ関係者で開催(招待制)

会場: SIGHTS KYOTO (京都市東山区宮川筋 2-255)





｜参加者名簿｜ ※順不同

涌波 まどか(蘇峰窯)/長友 健太朗(NOHA HOTEL KIYOMIZU KYOTO)/梅林 信彦(京都市東山区役所地域力推進室)/宮井 俊二(京都市東山区役所地域力推進室)/明石 一孝(京都市東山区役所地域力推進室)/山本 豊(ARCO TETTO 株式会社)/中田 俊(株式会社夢びと)/松田 直子(株式会社 Hibana)/井上 和彦(公益財団法人京都市環境保全活動推進協会)/吉田 恭三(京都市産業観光局 地域企業イノベーション推進室)/大江 将仁(京都市産業観光局 クリエイティブ産業振興室: 出向: 株式会社京都産業振興センター)/仲筋 裕則(京都市総合企画局 都市経営戦略室)/前田 展広(京都市ソーシャルイノベーション研究所)/田中 慎(税理士法人田中経営会計事務所)

｜トークセッション企画・運営｜

桜井 肖典(一般社団法人リリース)/風間 美穂(一般社団法人リリース)/Chen Yuju(一般社団法人リリース)/堤 卓也(株式会社堤浅吉漆店)/西澤 徹生(株式会社ニシザワステイ)

「森林」と「京町家」を活用した展覧会の開催 : Arts in KOGEI / KYOTO

連携プレゼンテーション型ワークショップ

関連企画：漆ナイト・トークセッション in SIGHTS KYOTO

ー 伝統産業事業者

僕は人の繋がりの中でやれてきていることがあり、支えてくれる人たちがいる。工芸や地産地消が伝わればいい、と映画の中では話していたけれど、むしろ輪っかの方に意味がある。毎日一所懸命に生きている人たちの点と点が連なること。漆で言ったらずっと縄文時代から続いている時間軸と、僕が漆屋として曾曾祖父ちゃんから4代継いで、100年以上食べさせてもらっている工芸という時間軸がある。僕は材料屋なので、工芸という循環の中では、一人では何もできない。何の表現もできない。でも一つひとつ、一人ひとりが点のように繋がって、輪っかになってることが、めっちゃめちゃカッコイイなと思って、僕はそれを繋ぎたい。

漆のアライアを持って海外に行った時も、これは何だ？と近づいてくる。サーフボードの形をしてるから、すれ違った時に「とても光って綺麗だけど、これは何なんだ？」と聞かれて、これは木の樹液なんだよ、と循環可能な素材だと伝えると凄く驚かれる。とりあえず触ってみて！という質感にビックリされる。一時間くらい話を聞いてくれる中で、日本人が縄文時代から漆という木を活かし、ものを直したり使い続けてきた文化にとてもリスペクトしてくれる。それなのに、なぜ日本で生まれた僕たちがそれを捨てようとしているのか？こんな面白いものがなぜ忘れられるのか？もったいないなと思って。

そんな自分が思う小さなことが、中間支援の人たちや行政の人たちまで繋がって、知ってもらうような世界って繋がりが面白い。今回やっているアートと工芸を繋ぐ、ということもその一つだし。アートは難しいけど、僕はやっぱりアートと人もつながりたいし、山と海もつながりたい。京北とまちもつながりたいし、漆と人もつながりたい。そのキッカケになれたらいいな。とにかく有り難うございました。

ー 建築設計事業者

東山区内で40年ほど建築の設計事務所をさせていただいており、町屋の改修などに携わる仕事をしている。この場所(SIGHTS KYOTOのように)資本投下されている町家はとても整っており、魅せられる状態になっているが、京都内の町家は25000程あるが整ったものは少ない。実際改修となると足元の基礎部分が乱れており、直すとなると非常にお金がかかり(商業的に使う目的があれば資本投下されて整うが)住める状態までにはすることは難しい。

また耐震性や耐久性など色々なものを求められると、町家というのは構造的な担保が物凄く曖昧だ。遺すべき形というのは勿論あるが、町家というのは話されているように工芸品であり、これを新たに造るといっても技術だけでなく、今はもう材料がない。遺すべきものではあるが、そこまでお金をかけられる方がおられない。京都市としても潰さないようにお達はあがるが、現存している町家もこれから半分は潰されていくかもしれない。

私も工芸品としての木の住まいを遺し、次世代に伝えていくことはしていきたいが、ジレンマの中で闘っており、日々苦勞している。京都は戦争を経ても古い木造建築は多くあるため、それをどう活用していくか考えていかないといけない…今回のように既存の概念に縛られない面白い動きや若い方々の自然観というようなものを聞き、まち自体の仕組みを変えていくような動きにしていきたいと参加した。そして、工芸品としてのまちづくりということを考えていくことも、京都や日本ということだけでなく、世界へ色々なものを発信していくチャンスになると思う。

ー 観光宿泊事業者

堤さんが仰っていた、感覚的に「良いな、と思って使っていたら漆だった、伝統工芸だった」という感覚が凄く大事だと思っている。ノーガホテルを今回つくるにあたって、どちらかというと伝統工芸を使いたいというよりも、感覚的に本能的に良いな、と思ったものをただただ探して、ベースにして創っていった。逆に言うと、伝統工芸師さんにとっては、自分たちの特徴やデザインを殺すようなことでももらったかもしれないけど、ホテルは狙っている顧客ターゲット層はそれぞれ違いますし、僕らが狙っているお客様に対して「良いな」と思ってもらえることを最優先に考えて取り組んだ。

京焼や清水焼の作家さんだったり、宇治の漆屋さんだったり、色んなところにごく柔軟に対応していただけた感謝している。そして本当に感謝している。堤さんが最初に仰っていたこと、これから工芸と現代のライフスタイルを近づけることが、やはり一番大事のように個人的には感じた。

ー 中間支援組織従事者

奈良では2011年から続く町家再生に寄与する芸術祭というものがある。空き家は持ち主が東京にいたり、仏壇があったり、貸し出すよりそのまま放置という問題があった。ただ、まちづくり団体は地域に信頼があるから、不動産に流れないような物件を、そういう信用ある人や関係性ある団体へは貸すよ、という流れはみられた。そこで私は芸術祭(奈良・町家の芸術祭はならあと)のソフトを渡して「利活用の機運が上がる」というスキームを作ったり、芸術祭やるだけでなく「一週間だけお店やりませんか」「一週間だけ貸してあげてください」というサブリース事業みたいなこともやったりしながら、広がりを後押ししてきた。

市と組むことで出来る大義名分として、町家を開いてみるという機会を、美術を通してやってみること。やってみたら面白かったとか、価値を見つけて「使ってみたい」という人が現れた、という事実や借りる人が増えたという実績を創っていくことは有効だ。これは社会実験として「一週間だけ貸す」という互いのお見合い期間でもある。いきなり年間で払うとか、何年間も貸す前提ということでなく、お互いが安全な機会をつくるという点では他都市にも参考になると思う。

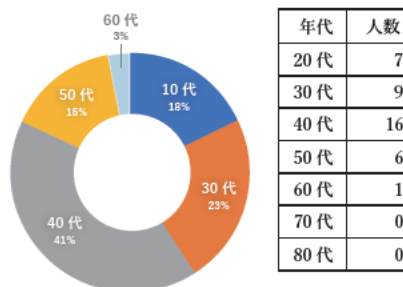
また80名程が登録する「掃除部」という集まりがあり、周辺で家を探している人たちが学生が参加する。「次この町家を掃除します」と声がかかると部のメンバーが集い、オーナーさんもいらっしやる中で「いい建物ですね」と褒められる。内心は「こんなボロボロのところ誰が借りるんだろう」と思っても、だんだん気分も良くなり、また移住が決まったりするなどインパクトも出ていた。お掃除はとてもプラットホームになるし、東山にも大変参考になるはず。このモデルは信頼関係資本とも言える。つまり信頼がある人にしか貸せないため、それを担保し続けるための存在を、事業に置いておかないといけない。前述のプロジェクトでいえば、奈良県庁の土木科のまちづくり振興課の方が、景観を保持するためのNPO団体に対して「守るだけでなく活用もしていかないといけない」との観点から、活躍する人を増やすための施策として、起爆剤となる芸術祭をやられたのが町家活用のポイントとなった。

実現に向けたアセスメント

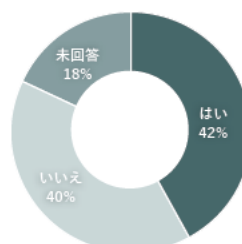
本事業では、アーティストに対して開かれるべき未活用の公共空間である「森林」と遊休空間としての「京町家等歴史的建築物」において、アーティストの表現の機会を拡大するための仕組みづくりに向けて実証及び実現に向けたアセスメントを行った。京都に限らず全国的に同じ構造に起因する課題により未活用空間となっている場に対して、「ふるさと納税型クラウドファンディング」などを用いることでアーティストがその未活用空間で作品制作をしたり、展覧会を開催したりする機会を継続的に展開でき、それらの経済活動により得られた収益を再び、公共空間の保全に還元する流れを生み出せないかと考えた。そこで、本実証事業におけるアセスメントとしては「展示作品を購入することにより、未活用の公共空間等の支援にもつながるとしたら、潜在的支援者はどのような振る舞いをされるだろうか？」という観点から、本実証事業における展覧会【Site1：弘道館】、【Site2：合併記念の森（工藝の森）】の各会場で鑑賞者にアンケート調査を行なった。あわせて、次年度以降の実現と他地域への横展開に向けた可能性と課題を検討するために、本事業に関するアート活動の当事者によるレポートや関係者へのインタビューによるヒアリング調査も実施した。

※【設問 6】の自由記入欄は別紙に回答をまとめ、次項にはアンケートの回答者数や傾向に関する一覧を掲載する。

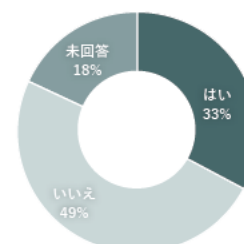
来場者年齢／回答人数：39



設問 1：作品を鑑賞される前に、それぞれの会場へは訪れたことはありますか？

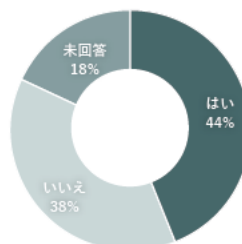


Site 1：有斐斎弘道館

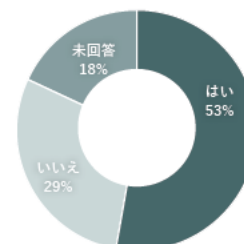


Site 2：工藝の森

設問 2：作品を鑑賞される前に、それぞれの活動や団体についてご存知でしたか？

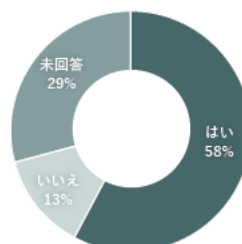


Site 1：有斐斎弘道館

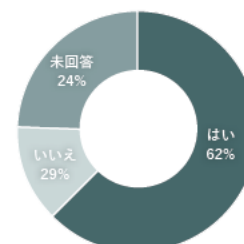


Site 2：工藝の森

設問 3：本作品購入が歴史的建造物の保全へも寄付になるとしたら購入検討されますか？

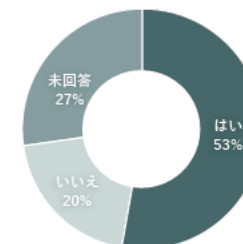


Site 1：有斐斎弘道館

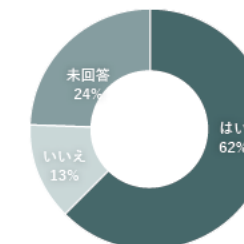


Site 2：工藝の森

設問 4：本作品購入が自然環境 / 公共空間設備へも寄付になるとしたら購入検討されますか？

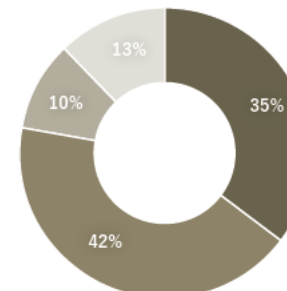


Site 1：有斐斎弘道館



Site 2：工藝の森

設問 5：購入を検討されるとお答えの方は、いくらの価格帯までなら検討可能ですか？



- ① 1,000～10,000円台 35%
- ② 10,000～100,000円台 42%
- ③ 100,000～1,000,000円台 10%
- ④ 1,000,000～10,000,000円台 0%
- 未回答 13%

200,000円
300,000円
作家さんと相談しながら

本展の作品購入を検討されるとしたら？

200,000円
300,000円
作家さんと相談しながら

実現に向けたアセスメント

アンケート分析

	日付	鑑賞場所	Q1-site1			Q1-site2			Q2-site1			Q2-site2			Q3-site1			Q3-site2			Q4-site1			Q4-site2			Q5-site1					作品購入検討額	年齢	職業
			はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	はい	いいえ	未回答	①	②	③	④	未回答			
1	3月17日	有斐斎弘道館	1			1			1			1			1			1			1			1			1				200,000	40代		
2	3月17日	有斐斎弘道館		1			1		1			1			1			1			1			1			1					20代		
3	3月17日	有斐斎弘道館	1					1	1			1			1			1			1			1		1						40代		
4	3月17日	有斐斎弘道館	1					1		1				1	1			1			1			1		1								
5	3月17日	有斐斎弘道館		1			1		1			1			1			1			1			1		1						30代		
6	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1	1					40代		
7	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1						50代		
8	3月17日	有斐斎弘道館		1			1		1			1			1			1			1			1		1				1		20代		
9	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1								
10	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1	1					30代		
11	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1						50代		
12	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1						40代		
13	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1					1	40代		
14	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1								
15	3月17日	有斐斎弘道館		1			1		1			1			1			1			1			1		1						30代	金融機関職員	
16	3月17日	有斐斎弘道館		1			1		1			1			1			1			1			1		1						50代		
17	3月17日	有斐斎弘道館	1					1		1			1		1			1			1			1		1						60代		
18	3月17日	有斐斎弘道館		1				1		1			1		1			1			1			1		1				1		40代		
19	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1		1				50代		
20	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1								
21	3月17日	有斐斎弘道館	1					1	1			1			1			1			1			1		1					20代	会社員		
22	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1					50代	会社員		
23	3月17日	有斐斎弘道館		1				1		1			1		1			1			1			1		1						40代		
24	3月17日	有斐斎弘道館	1				1		1			1			1			1			1			1		1		1				300,000	40代	
25	3月19日	工藝の森		1			1		1			1			1			1			1			1		1						40代	公務員	
26	3月19日	工藝の森				1	1			1	1				1	1			1	1			1	1		1						30代		
27	3月19日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1			1		1		1					40代	会社役員	
28	3月19日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1			1		1		1					40代	作家	
29	3月19日	工藝の森			1	1			1	1				1	1			1	1		1	1		1		1						40代		
30	3月21日	工藝の森				1	1			1	1			1	1			1	1		1	1		1		1						40代	研究員	
31	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1			1		1		1					40代		
32	3月21日	工藝の森	1				1		1		1			1			1			1			1		1		1					30代		
33	3月21日	工藝の森			1		1		1		1			1	1			1	1		1	1		1		1						30代		
34	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1	1			1	1		1	1		1		1								
35	3月21日	工藝の森			1		1		1		1	1			1	1			1	1			1	1		1						20代	学生	
36	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1	1			1	1		1	1		1		1						40代	会社員	
37	3月21日	工藝の森			1		1			1		1			1	1			1	1			1	1		1						20代	学生	
38	3月21日	工藝の森				1	1			1				1	1			1	1		1	1		1		1				1		40代		
39	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1	1		1		1						1	20代	学生	
40	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1	1			1	1		1	1		1		1		1						
41	3月21日	工藝の森	1				1		1		1			1			1			1			1		1				作家さんと相談しながら		50代	会社員		
42	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1			1		1		1					30代	作家	
43	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1			1		1					1		30代	染色作家	
44	3月21日	工藝の森				1		1			1			1			1			1	1		1		1		1					20代		
45	3月21日	工藝の森		1			1		1		1			1			1			1			1		1		1					30代	専門職員	

実現に向けたアセスメント

アート活動の当事者によるレポート

多様な想像力を繋ぐ公共空間

一般社団法人藝と 代表理事 青木 彬

「Arts In KOGEI/ 螺旋への反転」を含めて私がキュレーションを行なう際に考えていることのひとつに、アートをどのように社会化していくかということがあります。社会の中でどこにアートがあるのかと聞かれると、多くの人は美術館やギャラリーと答えるのではないのでしょうか。他方で、出かける時に服を選ぶことや、冷蔵庫に残った食材から夕飯のレシピを考えるというように、多くの人は日常的に「表現」と言える行為を行なっています。感情や想像力を伝達可能なカタチにすることを表現と呼べば、それはアートより包括的な概念と言えるでしょう。両者は決して従属関係にあるわけではなく、そうした「表現」を突き詰め、理論と実践を繰り返してきた歴史が「アート」です。そのように先鋭化するにつれて、美術館やギャラリーはアートをアートたらしめる制度として機能してきたことは事実です。しかし、それは「表現」ではなくあくまでも「作品」を記録してきた歴史であり、作品という価値観にはそぐわなかった社会の中の無数の創造力がアートという制度からは取りこぼされてきてしまったと思うのです。

本プロジェクトで主要なテーマでもあった工芸との関係性もそうです。アート（美術）は工芸をはじめ隣接するジャンルを区別することでアートの自律性を確保してきた歴史もあり、ジャンル形成といった視点から言えばアートと工芸は親しくもあり、やはり相容れないものでもあると思うのです。同時にアートワールドは現代に至るまで、ありふれた日用品から社会的な事象まであらゆるものを作品の素材として利用することでアートの概念を拡張してきました。多様化するアートの潮流として、積極的に社会に介入する特徴を持った作品や活動も現在では一般的になっています。特に私が専門とするアートプロジェクトと呼ばれる領域では、2017年に法改正された文化芸術基本法の中で、観光、まちづくり、福祉、教育など他分野との協働推進が

明記されたことは記憶に新しい出来事です。アートプロジェクトは今後も活発化していくことが考えられますが、例えば地域振興を目的としたり、協働分野の意図に寄り過ぎてしまったりはアートが持つはずの批評的、美学的な視点が無くなっていくという批判もあるのが現状です。他分野と協働するアートプロジェクトでは、プロジェクトや作品が美学的価値だけでなく、それこそ「表現」として、様々なステークホルダーの中で価値観が多義化しているとも言えるでしょう。

このように考えると、本プロジェクトは「アート」と「工芸」という異なる創造力を、今日的なアートプロジェクトというアプローチによって「表現」として統合していくというようなプロセスがあったように思うのです。その時にこの「表現」の拠り所として重要な役割を果たしたのは、今回展覧会を実施した2つの会場の特性でしょう。優れた建築と歴史性を持つ有斐斎弘道館、自然環境という人類的なコモンズに触れる工芸の森は、共に人と自然の共創を感じさせてくれる場所であり、公共性という意味を考えるきっかけになったようにも思います。

そして本展におけるアーティスト達の取り組みも、単に公共空間に作品が設置されて終了ではなく、それぞれの会場が持つ場所性やリサーチで出会った工芸の技術への敬意、自然と調和した循環型のものづくりの姿勢への共感、そして協働してくれたコミュニティとの継続的な関係性の構築という一連の出来事の帰結として表現されたものでした。ここでは京都における工芸の生態系という特異性のあるキーワードから、諸ジャンルを超えていく根源的な創造力（＝表現）の可能性が示されたのではないのでしょうか。

実現に向けたアセスメント

アート活動の当事者によるレポート

「工藝を「技・人・暮らし・風土・素材・道具など様々な要素の連関が立ち現れた象徴」と見て、アーティストがそれを表現することと、その表現によって町家や森林空間が価値づけられることは矛盾しない

一般社団法人パースペクティブ 共同代表 高室 幸子

これまで工芸というものは、「職人の匠の技の現れ」であるか、もしくは「歴史に根ざした地域産業」か、どちらかの側面でしか論じられることがなかった。いずれの側面でも、工芸の主体者が経済的成功を目指すとき、実績は個人の職人もしくは地域の一企業に属し、その賞賛と栄誉は工芸全体に分配されることはなかった。そういったことも加担し、素材や道具を扱う人々から、工芸の継承は困難になってきたのだろう。

技・人・暮らし・風土・素材・道具など様々な要素の間の複雑な連関が工芸の存続を可能にしてきたことを長年見てきた筆者が、工芸の重要性はその「全体性」にあると認識したのは、例えば森の中で様々な生物が互いに関与し合い、全体としてその土地の環境を変化させながらも維持してきたことに類似性を見出してきたことと大いに関係がある。

今回のプロジェクトではその類似性を念頭にフィールドリサーチのコーディネートをしたため、漆業界を取り巻く技・人・暮らし・風土・素材・道具などから「全体性」や「連関」の物語を捉えやすいよう、工藝に関わる川中の二人の職人（西村圭功氏・堤卓也氏）をキャスティングした。また川上の京北の森では、目の前に立ち現れるただ一片の、そして一瞬の森の姿のその奥に、長い時間をかけて人が関与しながら、あるいは水や動物の力によって遷移してきた、連関の物語があることを、森林生態学の専門である林業家（塔下守氏）を通して学んだ。自身がガイドした森のフィールドリサーチでも、「育ってきた土地の気象条件や地形、育んだ人のケアを湛えた素材が工藝のあり方を導く一方で、「工芸品」の形だけ眺めても、知識がなければその全体性や時間軸の広がりを感じ取ることができない、ということを伝えることを

意図していた。

二人のアーティストは日頃からこうしたテーマに関心を寄せていたため、作品制作の方向性は必然的に全体性や時間的な広がりを意識したものとなり、制作期間・展示準備を通じて筆者は、制作拠点や展示場所の管理者として、二人の制作環境を整えるために動いたり、展示についての手続的なタスクや技術的な課題をクリアするなど、実務的なサポートを行うことに集中できた。

本プロジェクトでは「アートによって町家や森林空間が価値付けられること」を実証実験の前提として置きながら、同時に「自然と人との間に広がる連関や相関関係を『工藝(*)』から紐解き理解し、それをアートによって価値付けたい」という、企画メンバー側の共通のテーマを両立させることを最大限考慮した。結果的に、「自然と人との間に広がる連関や相関関係」の中に「町家」や「人の森林への関わり」も含まれるため、一続きの実証実験として取り組むことができた。結局のところ、町家もまた工藝であり、工藝に対する礼賛はその先に自然に対する礼賛が必然的に存在する。それゆえ、工藝を「技・人・暮らし・風土・素材・道具など様々な要素の連関が立ち現れた象徴」と見て、アーティストがそれを表現することと、その表現によって町家や森林空間が価値づけられることは矛盾しないのである。

実現に向けたアセスメント

インタビューによるヒアリング

公共とプライベートの中間に位置するような空間や、町の文化や歴史や景観を担う京町家といった公共空間において、地域コミュニティとともに保全するという意識を高揚することが必要

京都市総合企画局 都市経営戦略室 課長 仲筋 裕則

生徒の減少などにより統廃合された小学校のように、人口減少により使われなくなる公共空間は増加するだろう。新たな利用方法による活用を進めるためには、既存の規制の在り方を再検討し、これまで公共空間を維持・管理してこられた地域住民と調整し、納得を得る必要がある。

例えば、今回の実証事業においては、弘道館の濱崎氏から「今回のアート作品の展示から、新たな公共空間の活用方策を見出せた」との感想があった。アーティストの提案による新たな活用方策を試行するためには、文化財の適切な利用など、規制を適切に踏まえて公共空間を利用すべきであり、行政や専門家による様々な調整が重要だ。また、私に関与した東山エリアにおける移住促進プロジェクトでは、町家をはじめとする木造建築物に対し、地域の住民が継続して関わる方法を構築し、地域の公共財として活用され続けることも必要だ。このことは、全国各地における空き家問題とも同じ課題である。新たな空き家税が実現した背景には、空き家を単なる私的財産としてだけでなく、地域の魅力を守り、高めるための公共財としての役割も前提としている。そのため、本事業を通して、地域コミュニティのコーディネートや、異なる価値軸で公共施設を活用するための課題について検討できた。

また、通常、公共施設を管理する責任は行政にあり、道路や公園の管理に瑕疵がある場合、損害賠償請求や国家賠償請求の対象になり得る。一方で、公共施設の老朽化に伴い、行政が負担する管理コストは増加する。これに対して京都市では「みつけ隊」というアプリケーションを運用し、市民から道路や公園等の損傷箇所を投稿していただき、市民の能動的な協力により成果を挙げている。この取組と類似するが、京北町の工藝の森の取組では、カメラを擬した装置を森林に設

置した。キュレーターの青木氏によれば、アーティストをはじめとする人々が関わり続けるという状況をつくるためにカメラを擬した装置を置いている、ということである。これは、人間同士が関わりを重ねる工夫を施し、地域住民が公共施設や公共空間に関心を持ち続けてもらう装置や環境を、アーティストの視点から提案したものといえる。

入会地のような公共空間は、地域コミュニティにより管理されてきたが、明治維新以降の近代国家化において、管理主体が行政に移ってきた。そのため、市民の「シビックプライドを育む半公共と半私みたいな間（あわい）」である空間の維持・管理の責務について、地域コミュニティの役割であるという文化が残っているものの、その考え方が少しずつ薄れつつあるのが現代の都市である。そこで、まずは、文化財指定されている施設や森林資源のように公共とプライベートの中間に位置するような空間や、町の文化や歴史や景観を担う京町家といった公共空間において、地域コミュニティとともに保全するという意識を高揚することが必要である。そのうえで、京都というまちが、公共施設等の資産を用いてブランドを醸成し、地域資源として活用することを例示することで、他都市における公共施設の活用を促進するための見本となりうると考えられる。ゆえに、本展覧会は有意義な実証事業であった。

実現に向けたアセスメント

インタビューによるヒアリング

プライベートな使われなくなったアセットという意味では、地方の茅葺きの古民家も市街地の公共施設も森も特殊な価値、地域だけでは守りきれない現状はどこも同じ

京都市総合企画局 都市経営戦略室 戦略デザイン課長 森岡 環

「自分ごと化ができる関わり方」を地域住民以外にどう作れるか？ 公共空間に新しい価値を生むためのアートという選択肢は、地域のコモンのな場を守るという意味合いだけでなく、これまでに無かった関わり方を創出する試みとして「ファンとなる共感者を増やす手法」という意味合いで、今回の実証事業が位置付けられよう。森にしろ町家にしろ、所有者がいるプライベートアセットということもあり、既存の価値や信頼を損ねずにできる（任せられる）ためには、仕組みやフレームが重要であり、その新しい関わりに「作品の（共同）所有や寄付」を通してコミュニティ内外の関係者や鑑賞者がマッチングされたことは、一つの実証事業として成果があったと思う。単純に行政だけで、何か公共空間を活用するイベントを仕掛けられるというのではなく、一つのやり方として恒常的に古民家や町家を使って、アーティストと何か新しい価値を生むプロジェクトができたとしたら、よくある町家の商業空間利用とは異なる価値創出と言える。町家というハードがそのまま残っているのではなく、商用という軸を得たことで例えばレストランができ、新しい客を吸い寄せたから価値として残せる物件もある。しかし中を全部改修してしまうことで、本質的な町家の価値も殆ど毀損されてしまうことになる。そうではない関わり方を、今回は試みようとしているわけであり、元々あるものの価値や意味や歴史を残しながら、新しい価値をアートによって重ねていくことをしようとしている。多分そこには、これまでやられてきた古民家による観光型の、観光資源としての利活用や商業施設という発展とは一線を画す高付加価値化になり得る。一見すると経済的に価値のないものに対して、アンチ経済のアーティストという存在は、元々その性質から「経済的な付加価値づけ」という点で親和性が高いというふうに理解していた。つまり経済によらないからこそARTには価値があると思っていたが、弘道館での展覧会を通して「そこまでサー

チしているのか」という点に驚いた。

今回は展示された作品に対して、アーティストが一緒にまわり、コンセプトや考えを伝えてくれた。私のように現代アートに詳しくない人からすると、様々なリサーチも含めて込めた思いや自身が普段意識すること、作品のスタンスや空間や背景などを聞きながら観ることができる体験は、これまでの鑑賞と全く違うものとして捉えられた。このような場を作れたこと、町家本来の価値を損ねずに新しい価値を重ねていけたことは、これまでと違う視点や理解を提示してくれる現代アートならではの、公共空間利用において今後さらに期待ができるだろう。

結局のところ資金は価値を認められ、預かれるところからしか託されないし、寄付もその一つの方法である。寄付という形なのか、あるいは参加料という形なのかは分からないが、何かこのような場を継続的に生み出し、事例を作っていくこと。また、できればそれを民間がサービス展開していくことで、官に資金を振り替えていく。そういう事業が増えていけば、文化財が守られるし、アーティストの活動の場も増えると本事業を通して実感した。次年度より京都市で進めるカルチャープレナーの動きも、ビジネスとして文化を守り、文化を活かす試みだ。

それは、ある種アーティストの活躍を支えるということをやっているプロデューサーであったり、まさに展覧会のトークセッションで話されていた Translator みたいな翻訳家たちをどう増やしていくのか？それをビジネスとして回せる人をどう増やしていくのか？という点が、今後の一つの大きなポイントになるのではないか。

その認知をとっていくこと、またそのような動きを見える化するネーミングやカテゴライズしていくのが行政の役割だと思う。実際にこういう活動を増やしていくことそのものが、街中で多数生まれてほしいと願っている。そして、本事業のような試みをやる人たちが増えてくるというのが、まず都市経営的には一番にありがたい。京都市が目指したいところではある。

実現に向けたアセスメント

インタビューによるヒアリング

作品購入の一部が寄付になることで、公共施設や遊休空間を守り、活用されることに共感するロイヤルカスタマーを作ること。 そうした民間の動きが、日本各地の地域資源を活かす行政施策に繋がるのであれば大変ありがたい

京都市文化市民局 文化芸術企画課 担当課長 原 智治

人口減少、遊休施設の増加は全国共通の課題。大都市でも、農村でも、細部は違えど共通のテーマにできます。課題を補うように、何かを提示すれば施設の価値が顕在化され、その「光」を観る人にとっては観光になります。場所の記憶や意味などをリサーチして可視化するのには現代アーティストが得意とするところで、アートには遊休施設活用のポテンシャルが大いにあります。

しかし文化芸術に関わる中で、行政では身動きが取りづらいところ、それでは出来ないということがしばしば起こる。それをどうするか？という問いに対して、私が10年ほど意識しているのは「いかにして行政が半分手を離せる状況」に出来るかということ。自由に動ける余地を担保しながら、民間のステークホルダーと進めるやり方を模索している。実行委員会を組んでみたり、例えば協定書を結んでみたり、「半分公共」という状況を目指す。その相手方に、現代アーティストがおられることもあるので、そうした方々とどうやってパートナーシップを組むか、ずっと試しています。そういう意味では、本事業も「実行委員会形式でも協定によるものでもないけれど、中間支援的な団体のコーディネートでパートナーシップの状況が立ち現れた」良い実証になっているように思います。

もう一つ、遊休施設を考える切り口として、文化財保護の観点があります。文化財をどうやって守っていくか、そのときに重要なことは「保存」と「活用」の両輪です。「保存」は修繕して管理をすること、「活用」は、長らく博物館の展覧や、建造物の特別公開が中心であったが、少し抽象化すると、その価値に気づいてもらって、自分ごとに感じてもらうこと。一言でいうと愛してもらうことだと思います。好きになってもらうこと、それが活用の本質。そうでないと何が起こる

かという、忘れられてしまうのです。「保存」だけでは10年単位では保ちますが、「活用」がないと、好きになっていただかないと、100年単位では保たなくなる。例えば火事の時に持ち出して保護してもらおうとすると、日々、何がどこにあるのか、どれくらい大事なもののか、認識してもらっておかないといけない。そういう「保存」と「活用」の思想が、そもそも文化財保護法にはあります。

それは郷土愛みたいなもので、我が街の宝みたいな感覚、ひいてはコモンズの意識ですね。町家も森もプライベートな対象として所有者がおられ、財産権でいうと明らかに個人なり法人なりの持ち物にはなりますが、でもウチの町内のもんやしな、ぐらいい感覚になってもらうことが活用の観点では重要です。関わりしろを作るということは、例えば町に文化財があって、年に1回はそれが見られるとか、子供たちにその歴史を教えるとか、そういう普及啓発としての機会など、様々なやり方があると思います。

京都市がArts Aid KYOTOという取り組みで、文化芸術活動に寄付集めをしようとなった経緯は、行財政改革計画より前に、コロナによる問題が大きくありました。かなり早い段階で文化事業の中止が焦点になり、音楽のライブや演劇の公演ができなくなるなど、どんどん施設がクローズして、自分たちの仕事がなくなっていくというのを文化に関わっている人は如実に感じました。その経験から、行政としては「どうにかして文化を守らなければ」と通常の施策以上のプラスアルファとして取り組んだ。しかし、その財源は急には生み出せないということで、寄付集めに至った経緯があります。いろいろ実験的に進める中で「社会全体で文化を支える在り方がある」ということにも気がつきました。この先に道があるかもしれない、それら直感が今に繋がっている話です。これは不幸中の幸いと言えるかもしれません。これまで

も文化芸術支援の文脈で、民間でのクラウドファンディングなどの機運はありましたが、京都市としてはあまり動けていなかった。そんな道があるとは数年前まで思ってもいなかった中で、近年クラウドファンディングやふるさと納税など既存の仕組みを活用し、誰もが真剣に自分たちの地域のことを考える時代がきたと、あらためて実感しています。

寄付集めに奔走しながら感じることは、その集め方に、二つ道があるのかなということです。一つはクラウドでの集め方。これは近年大いに伸びて顕在化しているけれども、広く薄く、突き詰めると税金の集め方に近い。これでは根本的には広く薄い関係性に留まるように感じられます。もう一つの道は、極少数の本当に価値の分かっている人が大きくお金を出すあり方。いずれかだけでなく両方必要ですが、このような少数派のある種の文化的な感性や、何か特殊なものを成し得ようと求めている人に響かせるやり方も、これから編み出していけないといけないと感じています。本展覧会のやり方もその一つだと思いますし、作品購入の一部が寄付になることで、公共施設や遊休空間を守り活用されることに共感するロイヤルカスタマーを作ること。そうした民間の動きが日本各地の地域資源を活かす行政施策に繋がるのであれば、大変ありがたいことだと思います。

実現に向けたアセスメント

インタビューによるヒアリング

「次に繋いでいこう」というものは、自分が感動するからやる、というようなこと。 アーティストが表現してくださる機会は、そのような感性を拓くことにつながる

公益財団法人有斐斎弘道館 館長 濱崎 加奈子

私達の先人は“まるっと”残してきた、ということをお伝えしたいと思いました。

アーティストのおふたりがフィールドリサーチを経て、この空間に対して「ここで表現したい」と仰ってくださった。そして、見事に表現して下さり、ものすごく感動しました。「この建物すごいな」って。伝統的な建物は、様々な表現を受けとめてくれる器なんだということ、を、私自身「発見」させていただいた思いです。これまで永く手入れをしたり、手直しをしながら、使わせていただいていたこの空間ですが、展覧会というかたちで、露地庭を渡り、作品として設置されたカメラを覗きながら茶室の方へと歩み、茶室に入り、しばし作品を味わわせていただいた後、襖を開けて広間の方に出ていったときに、本当に感動したんです。いつもと全く違う感覚でした。私は15年間この建物に関わってきましたけど、今回これまでとは全然違う感覚を味わいました。この展覧会での体験は、まさに「茶道だ」と感じました。茶道が歴史上かたち作ってきた「作法」とは異なりますが、アーティストの方々は、茶道の骨格を完全に理解されておられる。表現方法は異なりますが、「まさに茶道なのだ」というのはそういうことです。それはアーティストの方々のご努力や感覚の鋭さもさることながら、空間そのものが教えてくれたのだと思います。我々の先祖が作ってくれた、空間そのものに込められている知恵が「やっぱりあるんだ」ということを、今回改めて感じさせていただきました。本当にありがとうございます。

今まで気づいてなかったけれども、“まるっと”とあることによって、いつか誰かが気づくかもしれない。そういったものを湛えているのが日本の伝統的な文化であり、芸能であり、芸術であり、暮らしなのだと思います。

私は日本の美学を研究し、広めてまいりました。例えば「型」のよう

なものは何となく「堅苦しい」と言われます。でも、そう感じる私達の「尺度」は「正しい」のでしょうか。採算が合うかどうか、といった尺度が代表的ですが、ひょっとしてそれは、この時代だけの、数千年の歴史のなかの、たった数十年の間だけの尺度かもしれません。型は、身体を通して伝承していく以上、変化するのは当たり前です。だからといって、「ここ要らないよね、今」と切り落としてもよいのでしょうか。型は「そのまま」伝承しようとするのが原則です。その原則があるからこそ、いつか未来に、その時代に必要な引き出しを開けてくれる可能性が残されるのではないのでしょうか。それが“まるっと”伝承してきた私達の先祖の知恵なのではないかと。その意味でも、この空間を通して“時間を感じる”ことができるかどうかは大切で、そこでは「自分」が試されているように思うのです。逆に、こういう空間で過ごしていると、時間を感じ取るためのトレーニングを積みされているのではないかと思うことがあります。

物を見る時にも、以前の自分よりも、物があることに対して、ただただ「ありがたい」と感じるができる自分が育っているということ 생각합니다。「古いものだ」と切り捨ててしまうことは簡単ですが、そうではなく、物を「ありがたい」と思える感性を空間が育ててくれる。“ぱっと回路をひらいてくれる”きっかけを与えてくれるのでしょうか。こういう伝統的な建物だったり、伝承されてきたものが身の回りにあることによって、ふと気づく瞬間があるのだと思います。京都はまちを歩けばそういった「きっかけ」を与えてくれるものが溢れています。町や通りの名前ひとつにしても、あちこちで「時間」を感じることができます。

時間を感じることは、自然と「生かされている感覚」につながります。「次に繋いでいこう」という気持ちが芽生えます。そこには、費用対効果や、効率のかどうか、手がかかるから面倒といった考えが入る余

地がない。自分が素敵だと思うから素敵だし、自分が感動するからやる、というようなこと。今回ようにアーティストが表現してくださる機会があると、その体験によって、そのような感性を拓くことにつながるのではないかと期待しています。

実現に向けたアセスメント

アート活動の当事者によるレポート

アーティストだけでは作れないアートの作り方： 公共空間をアートの現場に見立てていくことで生まれる新たな創造力に映るアートの原点

美術家 山本 愛子

今回、公共空間や歴史的建造物での展覧会を通じて、多くの貴重な経験を積むことができました。美術館やホワイトキューブのような、アート作品が守られることを前提に作られている空間ではないことから、様々な工夫や人々の協力が求められ、そこから生まれた新たな作品の見え方があったように思います。弘道館では、庭、茶室、床の間などの意味や作法を知ること、自分の知見が広がり、作品の設置方法や鑑賞方法もその作法になぞらえるなど、場所と作品が共鳴し合い、双方にとって新たな視点が加わったと感じます。また、床の間を写真家の外山さんと共通のテーマで使用するなど、日本建築ならではの空間に作品を置くということにより、他のアーティストとのコラボレーションやお互いの作品の理解、交流に繋がった実感がありました。

工藝の森での展示では、自然環境に作品が晒されることで見えてくる新たな視点がありました。例えば今回は水をテーマにした作品ですが、実際に作品を設置したエリアには川が流れており、水の音を聴きながら作品を鑑賞することができます。他にも、風の動き、染料に使用した植物が作品の目の前に生えていることなど、作品の原風景とも言える生の現場でアート鑑賞をすることで鑑賞者の五感を開き、より作品の意図を相手に伝えることができたと感じることができました。

今回のような公共空間や歴史的建造物で展覧会をするにあたり、美術関係者を超えた地元の人との出会いや繋がりがあったことは、制作において非常に重要でした。例えば森での搬入の際、作品を設置するために木の高い部分に糸をくりつける必要がありました。その際には地元で林業を学ぶ高校の先生にご協力いただき、木に登って搬入をアシストいただくことで理想的な作品の設置が実現しました。この技術は美術のインストーラーでは不可能なことでした。その意味でも、公共空間で作品を設置するということは、アート業界の外側の人々へ出会いを求めることであり、それが現地の方との交流や土地への理解が深まることに繋がります。

結果的にその交流が作品の質を向上させ、アーティスト自身の経験値が向上していくという良いサイクルが生まれるのだと思います。人との出会いが展示に良い影響を与え、展示に多様性と豊かさをもたらすと言えます。「人との出会い」という点で、今回最も必要不可欠だったのは中間支援的な役割でした。私は普段神奈川に住んでおり、京都にはほとんど知人がいない状態から今回のプロジェクトが始まりましたが、展覧会が終わる頃には多くの人々とのつながりが生まれ、また必ず京都に関わりたいと強い意思が芽生えるほどに充実した時間を過ごすことができました。そのような充実した時間になったのは、本事業の主催である一般社団法人リリースが、リサーチの段階から多くの方に繋げてくださったおかげです。一般の観光では出会えないような、地元での信頼と繋がりがなければ拝見できない場所にたくさん連れて行ってくださいました。例えば、今回の展示会場となった森や、漆の生成、器作りの現場、その器が使われるお茶室などです。また、ランダムに様々な場所に連れて行かれるのではなく、森から町までの間で工芸品が生まれる一連の流れをたどるようなリサーチをデザインしてくださいました。そのリサーチがあったからこそ、今回の展覧会のキーワードでもある「工藝の生態系」という発想が、主催者、関係者、キュレーター、アーティストたちの共通言語として浮かび上がってきました。私のような外部から一時的にやってきたアーティストと現地の人々を繋げる中間支援には、様々なスキルが必要だと想像します。現地の人々との長期的な信頼関係を築いていることを前提に、人々を繋ぎ合わせるためのスケジューリングなどの事務的なスキル、どのようなテーマを持って場をセッティングするべきかというクリエイティブな視点と経験、そしてそのプロジェクトが未来にどのような意味を持つのかという長期的な視点を多様な人々と共有していくための言葉を紡いでいくことが必要です。アーティスト個人の力では超えられない壁を、様々なスキルを駆使して支えてくださいました。そして、上記のリサーチによって出会った一般社団法人パースペクティブ

さんは、今回私の制作を物理的、現実的に最もサポートしてくださいました。具体的には、滞在制作場所の提供、車の提供、作品に使用する素材(植物)の提供、森の管理手続き、地元の林業高校との協力などの多岐にわたる手厚いサポートです。作品制作のために、京北にあるパースペクティブさんの事務所をお借りして滞在をさせていただきました。事務所は築100年以上の日本家屋で、水場や風が通る干場など、染色作品を制作するために必要な環境が整っていました。日本家屋の特徴である扉の数が多く、制作をする際の動きやすさにつながりました。縁側に仮設の染め場をつくり、庭に仮設の干場をつくり、台所や離れの風呂場、屋外の水場などを利用して染色作業を行いました。この環境に助けられ、短い期間でしたが45mほどの布を染め上げることができました。また、今回の作品に使用した染料は、パースペクティブさんが管理する森に生息する野草、馬酔木とソヨゴです。植物採集には現地の管理者とコンタクトをとり交渉することが必要です。日常的に森に関わっているパースペクティブさんの存在がなければ染料を入手することはできず、今回のような、土地に根ざした作品が生まれることもなかったと思います。最後には植物採集をした森自体が展覧会会場になり、すべてが繋がったような達成感でした。リサーチ段階から展覧会本番まで長きにわたってお世話になりました。

外部から一時的にその土地に訪れて制作・作品発表をするアーティストの立場にとって必要不可欠なサポートは大きく2つあると今回の実体験から感じました。ひとつは「現地の人との繋がりが」、もうひとつは「生活・制作環境などの物理的サポート」です。

今回のプロジェクトではその2点を、リリースさんには現地の人との繋がりを築くという面での中間支援、パースペクティブさんには生活・制作環境の提供、作品の素材収集などの物理的な中間支援を中心にサポートいただきました。両者どちらが欠けても今回のような作品・展覧会の作り方は成立しなかったと痛感しています。

実現に向けたアセスメント

アート活動の当事者によるレポート

表現の具現化に必要な信頼関係

写真家 外山 亮介

今回、普段は展示会場として使用されることのない場所に作品を設置させてもらいました。

有斐斎弘道館に関しては、茶事を催す場としての建物の持つ特性を学ぶことで、場の作法になぞらえる展示のアイデアが広がっていきました。しかし、そのアイデアを実現するためには、弘道館側との交渉がいくつも必要だったと思います。例えば、庭に三脚を立ててカメラを設置することに関しても、どんなに配慮すると伝えたところで、歴史的建造物ではそれを許さない場所も多くあると思います。また、建具を外して、レンズを取り付けるための板を設置することも、こちらの意図をしっかりと理解してもらわなければ、許可は出されないことだったと思います。それらを可能にしたのは、中間に入ってくれたリリースの皆さんの表現者への理解と、現場となる弘道館との信頼関係だったと思います。そのおかげで、弘道館が長い年月をかけて手に入れた魅力に助けられながら、納得のいく作品を展示することが出来ました。

工藝の森に関しては、実際に森の中に身を置きながら、森の可能性から問題点まで、都市の生活とは異なる時間で語られる言葉たちに、表現者としてどう向き合うかを改めて考える機会となりました。漆が採取されるまでの15年～20年間、森の中に作品を設置させてもらいたいという要望は、普段こういった表現活動に触れる機会が少ない現地で働く林業の方々などからは、理解を得るのは難しいことだったかもしれませんが、時間の限られている中でスムーズに承諾を得られたのは、すでに関係性を築かれていて、信頼を得ているパースペクティブの皆さんが制作チーム内にいたからこそだったと思います。

どちらの場所で学んだことも、もしかしたらネット上で検索すれば得られる内容なのかもしれませんが、実際に足を運び五感を使って体感しながら自身の体に吸収していく場を提供してもらえた事は、とても

重要だったと感じています。

その学びは、作品の意図が伝わりやすくなると共に、作り手として新たな表現の手法が浮かびやすくなるように感じました。作り手がただ「こういうものを作りたい」というイメージだけで場所を選び、独りよがり制作にするのではなく、リサーチする機会として、場を提供する側と作り手の両者を繋ぎ、対話する場を与えられ、またこちらのわかりにくい言葉を、中間に入るリリースさんやパースペクティブさんが理解しやすく伝え直してもらったことで、より良い作品づくりに取り組むことが出来たように思います。本当にありがとうございました。

作り手の考えている世界観、つまりは「こういう表現がどのような作用を生み出して、鑑賞者や世の中に伝わっていくのか」を、中間に入っ

てわかりやすく解説してくれる存在が、今後も重要になっていくのだと今回の展示を通じて感じたと同時に、それを可能にするのは、関わる人すべての信頼関係なのではないかと改めて考えています。



実証事業後の可能性

森林空間の活用

令和4年度から始まった「京都みどりプロジェクト 森林の応援団づくり事業」は、京都市が認定した7つの民間プロジェクトに対する必要な資金を、ふるさと納税型クラウドファンディング等の寄付によって募り、集まった金額を京都市から各プロジェクトへ補助金として交付するものであるが、これらの中に現時点でアート活動は含まれていない。

一方で、本事業による新しい仕組みづくりに向けた実証とアセスメントによると【本作品購入が自然環境 / 公共空間設備へも寄付になるとしたら購入検討されますか？】という問いかけに対し、64% が「はい」と回答し、52% の人が一万円以上の購入額を検討するという結果が見られた。また【作品を鑑賞される前に、それぞれの活動や団体についてご存知でしたか？】という設問に対し、「はい」と回答した53%のうち、49%の人がこれまで工藝の森には訪れたことがなかったと回答していたため、本展覧会を契機に京北地域への初滞在に繋がった。この結果から、**アート活動による森林の活用は、人々の関心を森に向けさせ、また人流を高める効果がある**ことが認められたと言える。

また、本事業により計画されたスキームは、今後ふるさと納税型クラウドファンディングを経由し「購入や共同所有されたアート作品売上の一部」を通して、次なるアーティストによってアート活動による森林（工藝の森）活用の原資へと再投資されることを促すものであり、「京都みどりプロジェクト 森林の応援団づくり事業」上でアート活動を掲載できれば、分野を横断した経済循環が期待できる。

それらを踏まえ、**本実証事業の結果をもとに、次年度以降初めてアート活動が「ふるさと納税型クラウドファンディング」へ掲載できるよう、関係者間では協議を始めている。また本事業を契機に、工藝の森におけるアート作品制作実績が脚光を浴び、現時点で海外からアーティストやリサーチによる「アーティストインレジデンス」の依頼が入っている。**本事業で見出されたスキームを活かし、今後は積極的に国内外のアート活動を受け入れることで、寄付額の向上や継続的な支援モデルを生み出していけるだろう。

さらに本事業の実証による副次的効果として、以下の点が挙げられる。

- 1) アーティストによるアート活動を用いた森林活用をサポートするノウハウ共有や地域の森林保全活動を行う民間団体、行政担当課との連携構築が図られ、これまでになく市内外から新たな作品制作や展示等への対応やチャレンジを受け入れやすい土壌がつけられる。
- 2) ふるさと納税型クラウドファンディングによる「作品購入」や「返礼品による作品鑑賞チケット」の提供は、既にアートや森林に関心があった層ではなく、これまで当事者だけではリーチできなかった一般鑑賞者や地域企業等による森林への関心を訴求することが期待でき、結果ランニングコスト不足の解消に向けた寄付額向上に期待が寄せられる。
- 3) これら一連のプロセス自体に自治体職員が関わることで、既存の縦割行政による弊害（文化や芸術等への理解不足や専門知識の壁）をコミュニケーション量の増加により改善させるだけでなく、所轄部署を跨いだ施策に位置づけることでステークホルダーを増やすことに繋がるだろう。

京町家の活用

平成 29 年度から京都らしい町並み景観と生活文化の象徴を守るハード面の改修や保全等の費用補助を目的とした「ふるさと納税寄付金や京町家まちづくりファンドへの寄附」は募っていたものの、あくまでも文化財保護の観点から認定された対象に充てる資金集めが主な目的となり、これらの取り組みに本事業のような「アーティストによるアート活動利用や展覧会等のソフト面に対する費用補助」の文脈は含まれていない。

今回、本事業による新しい仕組みづくりに向けた実証とアセスメントを試みると【本作品購入が歴史的建造物の保全へも寄付になるとしたら購入検討されますか？】という問いかけに対し、58% が「はい」と回答。全体の 10% が 100,000 ～ 1,000,000 円台の購入額を検討するという結果が見られた。また展覧会初日に、弘道館で実施したアンケートの自由記入欄【本展の作品購入を検討されるとしたら？】という設問に対しては、200,000 円や 300,000 円といった具体的な金額イメージも得られた。本展覧会では僅か 1 日だけの試験的な展示ではあったが、アーティストや地域企業や行政関係者等による座談会（チェックイン・トーク）において、**歴史的建造物と現代アーティストによる表現手法の相性が良かったこと、今後も継続した展覧会の開催にも期待が高まっていた**ことを添えておく。

なお、本事業をきっかけに見出されたスキームは、ふるさと納税型クラウドファンディングを通して「購入や共同所有されたアート作品売上の一部」が、次なるアーティストによってアート活動による京町家（弘道館）活用の原資へと再投資されるものである。そのため京町家保全や継承の観点では、「京町家まちづくりファンド」や「京町家まちづくりクラウドファンディング支援事業」の上に今後さまざまなアート活動を掲載していくことで、新たな寄付金獲得への布石となる兆しが見られたため、区単位で取り組める規模から幾つかの京町家を実験的に開放し、地域に所縁のある地域企業と連携しながらスキームの社会実装を試みていくための議論が生まれつつある。加えて、**遊休空間や歴史的文化施設利活用の観点から、アートプロジェクトの支援プラットフォーム（Arts Aid Kyoto）でも本事業実証結果を踏まえ、新たに「寄附つき作品の購入券」や「京町家でのアート作品鑑賞券」などをリターンに設定・提案する構想が芽生えた**。また「ふるさと納税型クラウドファンディング」へのプロジェクト掲載に向けて動き出すと共に、それらを通じた京町家や木造建築等におけるアート活動が、より継続的に実現するための環境整備と支援者コミュニティが整いつつある。

さらに本事業の実証による副次的効果として、以下の点が挙げられる。

1）アート活動やアーティストが媒介となり、京町家や木造建築などそれぞれの固有の歴史や背景を活かした「アート展覧会」を小さく且つ複数人でも開催応援することが可能となり、既存のステークホルダー以上の支援者に出会う確率が高まる。

2）ふるさと納税型クラウドファンディングによる「作品購入」や「返礼品による作品鑑賞チケット」の提供は、既にアートや京町家や歴史的建造物に関心があった層ではなく、これまで当事者だけではリーチできなかった一般鑑賞者や地域企業等による歴史的建造物への関心を訴求することが期待でき、結果ランニングコスト不足の解消に向けた寄付額向上に期待が寄せられる。

3）これら一連のプロセス自体に自治体職員が関わることで、既存の縦割行政による弊害（文化や芸術等への理解不足や専門知識の偏在）をコミュニケーション量の増加により改善させるだけでなく、中間支援団体やアートコーディネーター（キュレーター）などを介して自治体側の所轄部署を跨いだ施策に位置づけることができ、ステークホルダーを増やすことにも寄与する。

今後 NFT など新たにクリエイティブな仕組みを用いて、地域内外から物件所有資格を複数人で担保できるようになったり、アーティストとの京町家による展示協働チケットを地域企業がスポンサーできるようになったりすると、地域ブランドを多面的に活かすことにも繋がる。その結果、寄附つきアート作品をつくるプロセスそのものをクラウドファンディングに掲載したり、アートプロジェクトで制作された作品が購入されたりすることで、財政支援やアーティスト支援にも貢献できるだけでなく、文化創出拠点装置としての京町家価値が向上すれば、これまで歴史や芸術から距離のあった地域企業等にとっても支援障壁を下げるかたちで、地域ブランド貢献や観光開発への応援要素も兼ね備えることが期待できよう。

いずれにせよ、森林利活用の観点でも課題とされてきた、既存の異なる行政管轄部署を越境しながら、経済価値を高めていくことへの理解醸成と納税額向上に期待したい。そのためには地域企業による後押しは欠かせず、アートコーディネーターの存在やアーティストインレジデンス等の制作支援をはじめ持続可能なまちづくりへの共創的コミュニケーションの下準備は必要不可欠だ。その点で、本展覧会は本当に多くの方々のご理解とご支援を賜った。関係者一同より、深く御礼を申し上げます。



